



逆転写酵素（前）

腐った魚のような臭いがする。新太は一人、排水口を覗きながら、手を突っ込むのをためらっていた。だが、後ろでは容赦のない視線が責めるでもなく、愛おしむでもく、無表情に背中突き刺さってくる。「もういいだろう」と何度新太は言いたかっただろう。だが、もう一人の人間はそれを決して許さないことはわかっていた。それはちょうど、目の前に餌があるのを決して逃さない野生とでもいうべき、本能だった。野生動物のような長い髪をした女は弥生といった。本名は立花皐月というのだが、彼女は最初から新太のことを見こんだわけではない。まず求めたのは新太の方だった。二人に肉体関係はない。従って、ごく当たり前の恋愛関係は一切存在しない。では、何があるのか？二人の間に横たわるのはクトゥルフ神話のような異形の不気味な神々だったかもしれない。ただ、二人のどちらも気づいていない。人間如きには気づかせないとも言うべく、二人は運命に絡め取られていた。新太の手は再び排水口に入っていく。ヌメヌメとした感触が身体中の毛を逆立てる。悪臭のする場所に自らの大切な体を突入させる心境を誰が知るだろうか。見ている人間は気楽だと思ふ。だが、弥生の目は爛々と輝き、新太の無私の奉公の一片さえも見逃すまいというふうに、新太の背中をとらえて離さない。少しずつ場に和やかな空気が流れていった。新太は肩の近くまでを汚れた穴に入れて、二、三度探るように腕の先を動かすように、体をひねると、今度は一気に手を水の出口から引きぬいた。「わあ」と弥生が声をあげた。それは、未知の大陸の伝説の生物の鳴き声を思い起こさせる。それ程、怪異な声だったが、新太は平然と弥生に笑顔を見せる。そして、手には汚れた貴金属が光っていた。その光りの反射は本当にわずかだったが、二人が勝ち得た最初の戦利品を誇らしげに二人は見た。そして、お互いの目を脳まで見通すかと思うくらい深く見ると、やがて、貴金属を新太は洗い出す。どうしても、新太にとって、失くしてはならないものが戻ってきた。心境としては、ほっとした気持ちだった。時たま訪れる誘惑の声。「こんな女なんか捨ててしまえ」という声に抗う男を思い出した。それが、自分のことだとわかると、おかしくなって頭の中、ひとしきり笑った。ただ、弥生に見えるのは、いつもと変わらず、優しく見つめている新太の顔だった。洗い終わった貴金属の全貌が明らかになると、弥生は急に、新太の手のひらの上に乗るものから、目を背けた。リングだった。それは、銀でできた、かなり高級そうな指輪で、女性ならば欲しいと思うに違いない代物だった。それにも関わらず弥生は興味を失ったように、そっと窓に向かって歩いて行った。新太は洗ったことを後悔した。もし、この指輪を綺麗に清めなければ、弥生は振り向いたかもしれないのに。だが、全ては遅かった。再び、二人の間に穏やかな時は流れない。もう今日は弥生が憎む人間と同じようにしか新太を扱わないだろう。弥生のことを皐月と呼ぶ人間と同じようにしか。新太は思った。「月のように全ての物が汚れなければいいのに」

でも、時は始まってしまった。必ず一生に一度は起こる生誕の悲劇を今まさに二人は一身に背負っていた。世界の生まれたことを呪詛する人間たちの怨嗟の念を受け止めていた。それが、唯一、二人の役割だったし、もう、この先もこれ以上の役割はないだろう。新太はせめて弥生はこの呪縛から解放されて欲しいと思った。だが、弥生は頑なだった。何故か考える時、新太は疑念と幸福感に苛まれる。もしかして、髑髏のことが弥生は好きなのか？たまにやって来る、名もない

青年。弥生は彼を面白がって、青年**S**と呼んでいた。一度新太は弥生に何故**S**か聞いてみたことがある。弥生は普段ならば、そんな質問など一刀両断で切り捨てただろう。しかし、その時、彼女は松阪牛のように極上の気分だったに違いない。答えて、こう言った。「しらばっくれ野郎の**S**だよ」髑髏がシラバックレル？髑髏は至って普通で二人とは異次元に住む存在ではなかったか。ただ、二人と接点のある髑髏は決してやってくるのをやめようとしな。それは、弥生にとって髑髏が、一種の実験動物だったのかもしれないのだが。同時に恐ろしい疑惑を新太は持っていた。弥生はもし、髑髏に皐月と呼ばれたら、最初に新太がそう呼んだ時に、包丁を抜いて、むかってきたようにするだろうか。是非そうして欲しいと思った。同時に、新太が髑髏と同列に扱われていることに幻滅するだろうなど考えた。それはちょうど弥生が昨日見た夢に似ているのだろう。弥生はとても広い海岸にいた。三六〇度海岸という信じられない場所である。陸地は全部砂浜で、髑髏と鬼に抱かれている弥生の姿は島の中央にある。そして、鬼と髑髏は決して動かない。それぞれが、それぞれに最も素晴らしい形をとって、弥生を抱いている。「既に、悪魔の賽が投げられている」と天空で声がした。確かにそうかもしれない。弥生は二人の男のことを思う時、いつも愉快さと、耳の穴に細い針金を通した時のような痛みを襲われる。たぶん、鬼は新太で、髑髏は青年**S**なんだろう。だって、彼の名前は髑髏なのだ。終末と同様に週末もいつか訪れる。新太と弥生が仕事に精を出す間、髑髏は外にいた。外の男と内の男。外の男には頼もしさと世界の案内役を。そして、内の男には庇護と世界の看守を。約束したものはまだ来ない。そのことに弥生は焦りを募らせる。二人の関係の破綻の兆候は徐々に見え始めていた。弥生は外に出なければならなかったし、新太は弥生が外に出ていくことを許すという残酷な決断をしなければならぬ時刻が近づいていた。それは日本の電車のように正確ではなく、タイの地方鉄道のようにアクシデント含みの遅れを伴ってはいたが、それでも電車はいつかはやってくるのだ。

ある日、轟々と音を立てて、青年**S**という列車がやって来た。既に、百度目の訪問だった。新太はその日、眠りについていて、死ぬことはないから、寝なさいと弥生に唆されたのだ。けれども、新太は半分眠って、半分起きて全てを聞いていた。弥生が、新太との緊張感、そして、安堵に満ちた矛盾したカオスを捨てて、外の爆発的な瀑流に身を焦がす姿を。髑髏は青年**S**であり、青年**S**は髑髏である。初めてその時、髑髏であり、青年**S**である存在は弥生を皐月と呼んだ。弥生は甘い声で「なあ〜に？」と言った。新太は、ああ、やっぱり弥生は最高だ、と一人寝ぼけた頭で思った。弥生は髑髏何かに心を許してなどいない。弥生は髑髏を利用して利用して利用して、骨まで食って捨てるつもりなのだ。ちょうど、新太が輝かしい外での身分を捨てて、汚いこの世界に足を踏み入れたのとは違うのだ。あくまで、その時、弥生が主で、新太が従だった。しかし、今起こっているのは弥生の従の側面だ。時として、弥生が見せる従の側面は獣性を伴っていた。それは狩りに出る百獣の王ライオンの雌と同じである。激しい敵意。冷酷な知能。そして、渇き。ここで新太の意識は途切れた。髑髏と弥生は出ていったのだ。弥生のいない世界に目覚めている理由は何一つなかった。新太は、ここで餓死するはめになるのだろうか。「起きろ」と弥生が命じるまでは起きないだろう男の悲しい結末を迎えるのだろうか。それとも、新太の過去を知るものが、助けだしてくれるのか。全ては外れていた。新太は髑髏になった。青年**S**になった。新太は青年**S**であり、新太は髑髏である。それが、世界の唯一の真実だった。弥生は最初から気づ

いていた。だから、青年Sにしたのだろう。全ては逆転の結果をもたらして、全ては補完性を持つ。

弥生と新太が出会ったのは、2011年8月だった。地獄への通勤列車は冷房などない。閉じこめられた車内に夏の熱気が充満し、暑気楼さえ出かねない様子だった。新太は電車に足を踏み入れた瞬間、空気がいつものイライラした紳士的なものから、冷然とした売春婦のものになっていた。艶やかな聖性を備えた女は満ちた力を隠しきれないようにそこに座っていた。弥生である。この時には弥生は既に弥生と名乗っていたし、新太も弥生の本名が皐月だなんて知っているはずもなかった。それでも、8月の暑い日に本を片手に座っている弥生は場違いに感じられた。何か特別な使命をおって、そこにいる眼をしていた。使命は人類的なものでもなく、地球的なものでもなく、ただ、宇宙的な法則の枠内にある極めて巨大な使命のはずだった。新太は周りの禿げたサラリーマンや、悲しみに満ちたベビーカーをたたんで、立っている母親に目もくれずに弥生に近づいた。弥生はまだ、本から目を逸らさない。新太は怯んだ。もし、弥生がまったく相手にしないならば、新太は地上一の道化者になるだろうからだ。しかし、新太には一方で確信があった。弥生は必ず、本から目を上げ、新太を見るという信念にも似たものが。そして、事実そうになった。だが、それは新太にとって、地獄行きの列車に平然と乗って目的地について、裁きを行うほうがまだましだったかもしれない。弥生は新太を見ると、平然と友達にでも言うように、聞いた。「何か用？」と。新太は答えを持たなかった。でも、新太の中には弥生でなければならない決然とした無意識が潜んでいた。それはちょうどタンカーの船底に眠っている水と同じだった。浮くためには必要だが、それは無用の長物なのだ。だが、新太の若い本能は失われた10年の経験のもとにあったから、決してひるまなかった。2011年は2000年代の物悲しさを含んでいて、新太にとって、今年こそは「今までにはない宝石」に出会うチャンスだった。そして、日々、恋をした男性のように女性へのプレゼントを買おうとする気概を持って、弥生にさらに近づいた。弥生は再び聞いた。今度も以前と同じ全くの動揺さえない、静かな声量だった。新太と弥生を乗客は見つめない。二人は地獄行きの列車から、乗り換えることが許された果報者のように、他の乗客とは異質だった。異物となった二人は次の駅で降りた。誰もいない駅だった。地獄の周辺の土地には誰も住みたがらないのだ。駅を出ることもできない。二人はどうして降りたのかも説明できない。きっと、二人はとてもお腹が空いていたんだろう。弥生は持っていたホットドッグを取り出して、新太に投げつけた。新太は驚いていたが、落ちたホットドッグを美味しそうに食べた。二人は無言だった。どちらも、何も言わなかった。言うことで壊れるものもある。そう信じている二人は地獄行きを逃れた代償を払わねばならなかった。駅員がやって来た。二人は切符を持っていない。すなわち、不正乗車だ。もし、地獄までたどりつけば、料金はいらぬはずだった。だが、二人は降りてしまったのだ。もし、降りなかったらという言い訳は通用しない。駅員は無表情に「不正乗車ですね」と見抜いた。弥生はバッグから、口紅を取り出して、唇に塗っている。駅員には新太が対応することになった。自然と。とても自然に。二人は最初から連れ立ったように。新太はまず、昨日この電車に乗るように言われたことを話した。駅員は新太の言っていることがわからないようだった。駅員はきっと10年、20年、いや50年もの間駅を守ってきたのだろう。そして、駅と規則以外のことは何も知らない人間が出来上がった。代

々続く、駅員の家系は確実に秘密を保全するように生きてきたはずだ。けれども、駅員は知らないという態度で、新太に接した。新太は困惑していた。電車は来る気配がない。弥生は助け舟を出す気がないの是一目でわかった。駅員と新太は向い合って立っていた。駅員は肩をすくめた。「規則を破ったらどうなるか私には知らされていない。ただ、規則を侵したものにどうするかは決まっている」沈黙が流れた。駅員は新太が反応しないのを見て取ると、決意を固めたいらしい。制服のポケットからサイコロを出した。赤い表面に金色の点がある面は一つ、ある面は6つというふうに存在していた。駅員は微かに溜息をついた。何が起こるかはわからなかった。駅員はサイコロに対して童貞だった。女の体の蜜の部分知らない男の思慮深さを持ってサイコロを扱った。ついに、地面にサイコロは投げられた。新太は黙って、それを見ていた。弥生も口紅を持った手を止めて、サイコロを見た。目の数は四。不吉だ。駅員は黙ってサイコロを拾った。そして、キョロキョロと辺りを見回した。世界の重鎮は変わらない。弥生があくびをした。そして、新太がそれを見た。駅員もそれを見た。そして、駅員は駅舎に帰ろうとした。その時、遠くから音がしてきた。車輪の疾走する音だ。しかも、かなり重い。霧が立ちこめた世界の向こうから光りが弥生を照らした。弥生はもう口紅を持っていなかった。ただ、手を二度三度握っては開くと、新太の肩に手を置いた。駅員は黙って見ているだけだった。もう駅員は完全な部外者だった。そして、二人を連れ去る列車の傍観者でもあった。ホームにやってきた列車は1920年代に造られたような、蒸気機関車に似たものだった。駅員は乗せようとするでもなく、二人と列車を交互に見比べた。弥生は新太から手を放し、考えこむように顎に手をあてた。新太は迷っていた。どうするべきか。乗るべきか。乗らないべきか。もしかすると、待っていればまた、地獄行きの電車はやってくるかもしれない。そうすれば、いつも通りの生活が待っている。ただ、飯を食って、仕事場に通って、多愛のない話をして、そして、罪人たちを裁く。決められた儀式のような生活から、深淵に落ち込むような、危険をどうして起こす必要があるだろう。弥生は一步列車に近づいた。新太は一步列車から離れた。弥生はそれを見て取ると、軽蔑のこもった嘲笑を新太に向けた。身を焦がすような自分に対する失望が後から後から流れでていく。新太はもう、後には引けないと感じた。引けば、精神が壊れてしまうだろう。追いつめられた新太は2、3歩前に出た。弥生はまだ先にいる。さらに一步前に出る弥生はまだ先にいる。さらに一步。弥生と並んだ。駅員は黙ってみている。制服の紺色はいつの間にか黒色と見分けがつかないほどになっていた。駅員は濡れていた。同時に二人も濡れていた。雨が降ってきたのだ。ホームには屋根がない。駅員は濡れたまま、まだ二人と列車を見ていた。弥生は意を決したように、新太の手を取り、列車に乗りこんだ。

ここではないどこかへと向かう列車は無音で二人を運んでいく。新太と弥生は隣の座席に座った。座席はガーゴイルを象った装飾が施されていた。灰色だったが、材質は炭を固めた物に違いない。触れると、指先にくすんだ黒がついた。弥生は新太の指を見て、微笑を浮かべた。和やかな、とても戦地に行く列車に乗っているとは思えない雰囲気の流れていた。他にも乗客はいた。虹色のフリースジャケットを着た無数の土気色の顔をした人々が自己主張を禁じられたように座っている。誰も口を開かないためだろう。車内はやはり無音だった。二人も環境に適応する

動物のように、じっと息を殺している。車内の静寂を破ったのは弥生でも新太でもなかった。一匹のネズミである。新太と弥生が座る座席の向かいの空いた席にどこからともなく現れると、キーキーと鳴いた。新太はもちろん弥生でさえもこの時はネズミの声なんて聞いたことなかったので、顔を見合わせた。そして、再び視線を小動物に戻すと、ネズミは臆することもなく、玉座に座る王のようにどっしりと座席に腰をおろしている様子だ。新太はネズミを特に嫌っているわけでもなかったが、灰色は嫌いだった。それは、一種の灰色のコートを着た人間を嫌うのとは違う。灰色の皮をかぶった生き物が嫌いなのだ。ネズミの色が灰色だから嫌ったのではない。ネズミの裏に潜む顔は灰色の顔をしていたからなのだ。「おい。人間」どこからか声が聞こえてきた。弥生は声のした方を向いた。いや、向いたというより、そのまま顔を動かさなかった。ネズミのいるところから声がしたのだから。新太はとうに、このネズミが普通、つまりただの小動物であるとは思っていなかった。弥生は何も答えなかった。新太も何も答えなかった。だって、いきなり列車内でネズミに話しかけられて、何を言うべきか知っている人はいないだろう。この時ばかりは二人は言葉を理解しない新生児だった。二人はただ、泣くこともしない静かな赤児だったのだ。列車内の他の乗客は誰も二人の方に関心を持っていない。徹底した無感覚を植えつけられた殺戮機械でもこうはいかないだろう。ネズミは再び二人のどちらかに言った。「おい。人間。俺だよ。ネズミだよ」新太はちょっと困った。ここはフレンドリーに「やあ、ネズミかい」と言うべきか。それとも、重々しく「ネズミ様でございますか」と言うべきか。結局新太はこれからもそうであるように、意志を弥生に譲り渡してしまった。弥生が車内の静寂を打ち破るネズミと同じくらい小さな声でいう。それはまるで、海岸脇のホテルで聞こえる波の音だ。「ネズミさんね。私たちに何か用？」ネズミの表情は変わらない。変わってもたぶんわからない。変わるのかどうかさえ不明だ。ただ、ネズミは『ネズミさん』という言葉が気に入ったらしかった。前足で顔を三度さすると、照れたように言った。「よしてくれ。俺はネズミさんなんて言ってもらえる身分じゃない」もはや、ネズミの視線は完全に弥生に突き刺さっていた。弥生はその切っ先を心理的障壁で固く守って通さないようにしている。「じゃあ。あなたの名前は？」彼女はあくまで丁重に尋ねた。ネズミは今度は顔をさすらなかった。代わりに弥生を好色そうに見た。新太はその視線を見ると、我慢ができない。だが、動けない。心は許さない、と三〇分にも渡る演説を行えそうな心意気なのに、身体は動いてくれない。典型的な意気地なしと新太は自分でも認めていた。大の男一人になら、それも仕方ないと言ってくれる人もあるかもしれない。しかし、崇拜する乙女がたかが、ネズミに不快な視線を投げかけているのを、怖くなって動けないのはまさに処女同然である。新太は自分は男でなく、女に生まれるべきだったかもしれないと思った。弥生は新太を横目で見て、ネズミの答えを待った。「名前を聞くのが、どういうことかわかっているのかい？お嬢さん？」ネズミの世界での常識など何もしらない弥生は「知らない」と答えた。今度は少しばかりの怒りが含まれていただろう。ネズミはキィキィと笑った。不気味な笑いだった。ネズミがどうして笑うかは知らない新太は、ネズミの笑い声を頭の中で聞いた気がした。昔の、他人の笑い声が聞こえてきた。新太はみんなの中では面白いやつだったかもしれない。でも、新太にとっては、笑われ者だった。それが、新太の自尊心を傷つけた。やがて、新太は他人との距離をとりはじめた。そして、弥生に会うまで、一度だって心を開いたことはないのだ。ネズミに笑われて、新太は過去を振り切るように、弥生の手を握った。弥生は新太の精一杯の崇

拝をはねつけるごとく、手を振り払った。新太はもう一度すぎるように握る。今度は弥生も、新太の熱意に負けたのか、何も言わなかった。ネズミはいつの間にか消えていた。ネズミの役割は弥生にわずかばかりの苛立ちと新太に過去を思い出させることだけだった。そして、二人は以前よりもわずかに、心が近づいた。列車にまた無音が戻った。新太は弥生の手からあふれる温かをかみしめて、幸福に浸った。これから、待ち受けている地獄以上に恐ろしい出来事を知ることもなく、赤児のように揺り籠に眠っていた。外の景色は相変わらず霧だった。今は8月の暑い日はずだった。あの駅に降りた時から二人の世界は変質していた。そして、それは決して後戻りできない使い捨ての人生そのものだった。列車はまもなく目的地に着こうとしている。少しずつスピードを緩めると窓の景色がはつきりと見えてきた。新太は目を覚ました。弥生はじっと新太を見ていた。氷のような表情でだ。新太の眠気は吹き飛んだ。そして、列車は駅についた。乗った駅とは違う駅にだ。アナウンスも何もない。ただ、ほとんど音もなく列車は止まった。

ドアが開く。他の乗客は連行される捕虜のように生氣のない顔でぞろぞろと列車を出ていく。一体どこへ向かっているのだろう。弥生は声にださずに一人考えた。ただ、彼らがどこに行こうと、関係ない。新太ならば唯々諾々と乗客の列についていくだろう。まるで、皆で歩けば大罪でさえ恐れるにたりぬとばかりに。新太と弥生はここで初めて会話らしい会話をする。新太にとっては啓示であり、弥生にとっては伝道そのものだった。「あなた名前は？」弥生の慈愛を含んだ声（新太にはそう思えた）が新太にかけられる。新太は震える声で名前を言い捨てた。名前など二人の間では意味をなさないというように。弥生は繰り返した。「佐藤新太。サトウシンタ。sato shinta」3度弥生は新太の本名を口に出した。口に出すことで覚えをよくする狙いもあったのかもしれない。でも、新太は弥生の言葉を自分に課された試練のように聞いていた。今までの自分をぬけだすチャンスがやっていた。それはいつもの通勤を外れたときから、いや弥生に出会った時から始まったのだ。決して外れてはならない道を外れた新太にとって、弥生は一戸の巨大な家屋だった。これからやってくる嵐に耐えうるだけの快適な住家。弥生は群衆とは反対側に歩き出していた。駅のホームは固い花崗岩でできた人工的な臭いのしない代物だったが、2箇所の降り口があるようだった。一つはなだらかな坂になった安全な着地点。一方は危険な崖のようになった斜面。弥生は迷わずに崖を選んだ。新太は弥生が跳んで地面に降り立った後、立ちすくんでいた。弥生は既に道でもない道（弥生が造っている道路）を歩き出していく。新太は去っていく弥生を見て、激しい不安に突き動かされた。また新太に過去の情景がやっていた。母という名の庇護者との最後の別れ。松の木に隠れるように新太は母を見ていた。松の影から父親が強く新太の首袖を掴んでいた。駆け出したい衝動を抑え切れない。もう一度だけ。新太は父親の制止を振り払って走った。母は黙って立ち止まった。そして、新太の頬を強く叩いた。そして去っていった。また、追いかけると弥生は新太を拒絶するかもしれない。新太は失われた過去の怨念に向き合った。今度は誰も彼のことを止めないだろう。弥生は新太を受け入れない。声が聞こえた気がした。弥生が振り向いた。じっとこちらを見ている。新太は新しい状況を前に勇気を出した。弥生は新太を待っている。この道に行くのは弥生と新太だけなのだ。弥生の無言の命令は新太を奈落の底に落ちる兔のように地面に落とした。まるで無様な落ち方だった。新太は起き上

がると、走った。霧も雨も降っていない。ただ、空には黒い幕が存在するだけだった。追いついた新太を弥生は無言で受け入れた。弥生は新太を精神的にはなく、物理的に必要とした。弥生は宿命めいた誘拐に似た行為を自虐的にみつめていた。ただ、この男はついてきたのだ。弥生は何も言っていない。二人は一直線に歩きつづけた。夜のせいか辺りには何も見えない。どれくらいの時間がたったかはわからない。二人の足音は光に誘われたように、一軒の家に吸い寄せられた。家は古い木造のアパートのような造りだった。どうにもならないことを知っている建物の賢明さで、時間の波飛沫を耐えている家はかろうじて光と呼べる電灯を持っていた。辺りには電線も電信柱もない。新太はふっと息を吐いた。暗闇ばかりの道は人を不安にさせるのだ。だが、逆に弥生は不服そうに、死刑を言い渡された善悪の観念のない容疑者のような目で裁判長ではなく、ある一点を見つめていた。新太もやがて、弥生の見ているものに気づく。二人の視線の先には一対のバットが置かれていた。「あれが私たちの唯一の武器よ」弥生の声は強い意志を含んでいた。新太は訳がわからないながらも、力強く頷いた。二人はバットを持って罰の混じった一室に入った。家具らしいものもない。ただ、ゴミだけが部屋には散らかっていた。生ごみの鼻をつくような臭いが立ち込めている部屋だ。新太は無言で部屋を片付け始めた。弥生は深くため息をつき、寝転がった。新太は弥生の盛り上がった胸の上下動を横目で見ながら、勃起して動きつづけた。バットには名前が刻んである。『この世の罪を取りのぞくものドクロ』『ドクロをみちびくものやよい』無情なる裁きがあるとしたならば、二人のためにあるに違いない。二人はやがて眠りについた。

翌朝（朝といっても外は闇のままだったが、二人の体内時計は朝であるとして目覚めたのだ）、新太は弥生に言われてバットの素振りをしていた。彼女は「素振りでしか、あなたは役に立つ人間になることができないの」と耳元で甘い声を出した。新太にとって使命があるとすれば、弥生の持つ言葉によって規定されるモノだった。百回は振り続けたらうか。手の皮は擦りむけ赤くなっている。バットのグリップには血が滲む。「来る」弥生が呟いた。ピーンと張った音がした。弥生は玄関に出てドアを開ける。外には仮面を被った一人の男が立っていた。そう男だ。弥生の部屋に訪ねてくる男。新太は彼女の処女性を信じていたので、少なからず驚いた。だが、深く考えてみると、処女性などは魂のことを言うのであって、肉体的なことは問題にならないと思直した。弥生と髑髏面の男は何事かを話している。新太には耳を澄まして聞くこともできたらう。だが、しなかった。彼はゆっくりとバットを振った。ビュンと木製の棒がうなりをあげた。ビュン。ビュン。手の痛みはもう感じない。喉元過ぎれば熱さだって意味のないものになるのと同様だ。例え、胃が熱さによってのたうち回るとしても、それは感じないのと同じことだ。弥生は二箱の弁当を持って部屋に帰ってきた。髑髏はもう、どこにもいなかった。弥生はそのうちの大きな箱を新太に差しだした。新太は血に染まった手で受け取る。二人は無言で、食事をした。新太は髑髏のことについて何も聞かなかった。弥生も髑髏について何も語らなかった。まだ弥生は新太たちの使命について何も話してくれなかった。弥生にとって弁当配達人と新太とどっちが大事なのだろうか。横になって、新太は考えた。弥生は極めて高度な思考の持ち主だ。高度が何かと言われれば、それは複雑という意味である。弥生自身には今の新太の思いに対する解を持っていなかった。そして、それはきっと何十年、いや何百年も解かれない問題のように、凝り固まった定型性をもつのだ。弥生という無意識の支配する怪物はやがて、決断する。自分がどう

動けば目的が達せられるのか。目的に向かって弥生は疾走する。それはいつまでも変わらない。そう、あの十二歳の時から。

二人は二人だけの生活（そして時に髑髏が訪ねてくる）に慣れつつあった。新太は髑髏がどこからやって来るのか知らない。わかっていることは男は決して仮面を取らないということだ。そして、芯の細そうな声をしていた。3度目に髑髏が食料を持ってきた時、新太は初めて玄関のドアを開けた。弥生はまだ寝ていたからだ。後に新太が髑髏と話したことに憤慨した弥生は、音がしたら必ず自分を起こすようにと言った。新太には理由はわからなかったが、弥生が言うことを無批判に信じた。結局、その一回の出会いでわかったことは、髑髏の声と話した言葉だけだった。「今日分だ。食べてくれ」新太が応対したことに気づいていないかのように、それだけ言うと髑髏は去っていった。渡された袋には熱い烏龍茶とカレーが入っていた。弥生と新太はトレイに入った食料を胃の中に残らずに入れた。それから、繰り返しの日々が続いた。新太はバットを振り、弥生はそれを飽きもせず眺める、という無限連鎖に似た生活。始まりは突然だった。弥生はこのアパートに来て初めて「外に出ましょう」と言った。その日髑髏はまだ来ていなかった。新太は黙ってついていった。外は相変わらずの闇だった。駅から来た時に作った道はまだそこにあった。足跡の軌跡が新太には見えた。

弥生は巨大なスタジアムまで新太を導いた。スタジアムの外観は蔦の絡まる白茶色の壁とその間にぽっかり窓があいている。入り口はどこにあるのかわからない。弥生はゆっくりとスタジアムの周りを歩き始めた。きっと、入り口もどこかにあるのだろう。しかし、新太はいつまで歩いても入り口も見つけれない。その癖、時々地響きのように中から歓声めいた震動が二人のところまで伝わってきた。弥生はスタジアムの外周を四度回って、新太の方を振り返った。「一周目にはなかった。二周目にはなかった。三周目にもなかった。四周目にもなかった。五周目にはあると思う？」新太は肩をすくめた。おそらく新太の心情は（どうして俺に聞くんだ？）といったところだろう。ただ、何も答えないわけにはいかない。それが新太の中での極めて凝縮された限られた抵抗だったとしても。「中に入りたいのかい？」新太の声を弥生は無視した。また歩き出す。何度スタジアムの周りを回ったか誰も数えていないほど、二人は巨大なスタジアムの周りを歩いた。決して急ぎはしない。決して疑ってもいない。弥生は入り口が見つかるという信仰を捨てきれずにいるようだった。天動説から地動説への時代の過渡期にあって、昔の教義を放棄できない悲哀がそこにはあった。

とても長い時間が経った時、新太の足が悲鳴を上げ始めた頃に、スタジアムの一四番ゲートに大きな鉄製の門が現れた。まるで、それは最初からそこにあって、今までの周回が無駄だと言わせるくらい自然なものだった。新太は黒い巨大な門を見つめた。弥生は門をどう開けるか考えているらしい。とにかく、門は頑丈そうだったし、誰も脇には立っていなかった。門は所々隙間が空いていて中の様子がわかるようになっていたが、覗いてみると何も見えない。新太はいつからかわからない非現実的な世界に驚くまいと決めていたが、重い門が重厚な音を響かせて、ひとりだけで開いていくのには、口を開けてポカンとしていた。今では歓声らしいものは何も聞こえてこない。

門の先には二メートルほど先が見える暗闇があるだけだった。光がないのに、どうして物が見えるのか不思議だったが、新太はその時初めて弥生が光っていることに気づいた。弥生は明らかに曙光だった。地平線から産声をあげた光の始まりは女性の身体全体に絡まって付着していた。「どうしたの？」弥生は新太に前に進むように促した。彼が立ち止まったのに気づいたのだ。新太は再び進み始めた。弥生は強烈な光りを持っていたが、それでも、スタジアムの中の闇は濃く光りは二メートルしか届いていない。新太なりに正確にいうと恐らく、その長さはアルパカの体長くらいだろう。

ちょうど、アルパカ、新太、弥生の順でスタジアムの中を歩いていくと、急に眩しい光りに出会った。弥生のような穏やかな光りではない。急激に変化する目を射す光りだ。目が慣れてくると、巨大な照明がスタジアムの照明塔に備えつけられているのが見えた。そして、どこから現れたのかわからない太った人たちが観客席で歓声をあげだした。今、新太はいつの間にかグラウンドの中心に立っていた。バットを持って。弥生は新太と並んで立っていたが、観客たちを軽蔑するように、見回して言った。「こいつらは、ただの餌よ。これから起こる出来事の潤滑油のようなもの」観客は何かを言っているが、新太には聞き取れない。恐らく多くの声が重音となり、明瞭な声を消し去ってしまうのだ。汗が出てきた。照明の強い光りは熱を帯びている。冗長なグラウンドの円周の一面から赤い点が見えてきた。点は円になり、一個の物体となった。赤虎だった。新太はそっとバットを構えた。弥生に視線を走らせる。弥生は目を合わせ頷いた。

戦う時が来たのだ。新太は不思議と怖くなかった。バットに目一杯の体重をのせて虎めがけて、振り抜いた。赤い虎は近づいてきた時には既に緑になっていた。訳もわからず新太はバットを振り続けた。手応えはない。向かってくる虎はやがて、紫になった。虎は新太めがけて、口を開けて飛びかかった。新太は目を閉じた。鋭い爪が新太を捕らえるかに見えた。太った観客たちの声は一層大きくなった。バットにまた手応えはない。しかし、目を開けると、虎は消えていた。弥生は満足気な笑みを新太に向けた。「あなたは勝ったのよ。光りの虎は、あなたによって消えた」「信じられない。まるで手応えがない」新太は震えた声を絞り出した。弥生は跪いている新太の肩を後ろからそっと抱きしめた。新太は心が落ち着き、平静を取り戻すのがわかった。「もう虎はいない？」「そう。あなたが倒した」太った観衆は帰り支度を始めたようだ。どんどんと、空席は増えていく。試合は終わったのだ。

二人は空になった暗いスタジアムに立っていた。照明は落ち、誰一人として観客は残っていなかった。弥生は力強い声を出した。「帰りましょう」新太は立ち上がった。その目は意識が異次元をさまよっているらしく、右に左に上に下に動いていた。新太は今見たものが何か判断をすることができなかった。新太の頭は確かに機能はしていたが、現実との関連を失っている狂った時計のようだった。そして、新太は弥生に自らの意志で問うた。「あれは何だったんだ？」弥生は大きく伸びをした。新太の問いは退屈きわまりないとでもいうように。しかし、はっきりと弥生の頭の中にも答えがあるわけではない。弥生に命じられたことは「新太をここに連れてきて、戦わせることだった。試練は二重にも三重にも人を絡めとる。決して逃れられない宿命であると新太は思ったかはわからない。少なくとも弥生は自分の行為は覆せない強力な力で占められた現象の一部と信じている。新太は弥生の背後に、招かれざる存在をみてとった。この頃から新太の心に

は二つの矛盾する意志が噴水のように高く意識へと上ってくるのだった。一つは弥生を信じようという気持ち。もう一つは弥生を、いや弥生の背後にあるものを恐ろしく思う気持ちだ。幻惑と妄想の世界から抜け出す方法はあるか？新太は自問自答した。新太は歩き出した。スタジアムの位置から二人が来たアパートはどちらの方角にあるかもわからない。スタジアムを出て、ひたすら新太は歩いた。それでも、新太は弥生の足音が後ろから消えてなくなるのを喜んでいて。新太はめちやくちやに進んだ。弥生を宿命から救い出そうという気持ちもあつたろう。自分が助かりたいという気持ちもあつたろう。混然とした気持ちは決して旅人を正しい道へは誘わない。新太はやがて、巨大な暗闇の先に星があるのを見た。星は赤、黄、緑、白、桃と様々な色があった。普通と違うのは夜空にあるはずの星がまっすぐ見つめた正面にあるということだ。新太は弥生を振り返った。聞こうと思ったが、聞くのをやめた。きっと弥生も何も知らされていないのだ。しかし、新太よりは遥かに、ここに順応している。確かな意志を持った目がそうだ。新太は直感的に、弥生はこの世界の理を理解していると感じた。「先には何も無いわ」弥生は新太の問いを予期していたかのように言った。それでも新太は星目指して歩き続けた。星は一向に距離を縮めない。もし、仮に星だったとしたならば、それは当たり前のことだったが、新太には星が後わずかで届くような心持ちがしていた。新太は一步一步世界の理を学んでいく。新太はやがて歩き疲れて、座りこんだ。新太より体格の劣る弥生は平気そうだった。「何故君は疲れ無いんだい？」新太の言葉が弥生をえぐる。弥生は受けた心の傷を相手には、新太にだけは知られまいとするかのように気丈に答えた。「それは私が希望を持っていないから。希望を持たない歩みは、何の意味もないわ。時間という観念からすれば、希望こそが最も邪悪で時間の浪費なのだから」新太は初めてと喋っている弥生の心の一端を聞いて、しばらく考えこんだ。果たして、新太は希望を持って歩いていたのか？断じて違う。新太が心の内に宿していたのは、危険を伴わない世界、安息の地への到達だった。それは希望というレベルではなく、大望という言葉こそふさわしい。しかし、反論する気はなかった。希望でさえ、疲れさせるのに、大望でどれほどの影響を新太が世界から受けているのか聞く気力は失せた。弥生は新太を失うまいと必死だ。それは決して新太を求めているからではない。ましてや、希望を持ってついてきたわけではない。弥生は新太についていくことを義務づけられているのだ。一体、いつから二人の間に関係性が生まれたのかは不明だ。だが、恐ろしい闇は二人を矮小な存在に落とし、群れることで、かろうじて生命を保つ生物へと変化させていた。新太は諦めて言った。「家に帰ろう」弥生は無表情に、それでも幾分安心したように新太を誘った。「こっちよ」明らかな変化が二人を包んだ。闇の道は急に活気を取り戻したように、弥生の前に現れる。新太はいつの間にか弥生の持つ光りが強くなっているのに気づいた。アパートは何も変わっていなかった。まったく何も。恐らく、階段の上の一塵の埃でさえ、そのままな気がした。実際それはアパートを出た時と同じように、固着するように階段につながっていた。「ここは不思議なところだ」新太はいつの間にか声に出してしまっていた。弥生は同意して、頷いたが突き放したように先に二階の部屋へ上がっていった。家には贈り物が届いているようだった。何もなかった部屋が、大小三〇程の箱が部屋に整然と置かれていた。弥生は既に、箱の一つを開けにかかっていた。新太は弥生のさせるままにして、眠りにつこうとする。しかし、腹が減ってどうにも眠れない。また音がした。髑髏だ。ご飯を持ってきた

のだ。新太は喜んだ。弥生は玄関に行く気配がない。まだ箱を開けている。箱を開けるとまた箱があったらしく、高く部屋に箱ばかりが積まれている。中身のあるものは何一つ見つかっていないらしい。弥生に以前禁じられていた髑髏との接触を新太は行うべきか迷っていた。そこへ、弥生が言った。「でてちょうだい」新太はご飯を一刻も早く食べたかったので、すぐに命令に従った。ドアを開けると、髑髏を被った仮面の男が、予想通りにそこにいた。ただ、顔の穴から覗く目はどこか寂しそうだった。そして不安そうでもあった。髑髏はビニール袋をぶっきらぼうに新太に差し出した。新太はお礼を言った。「ありがとう」良く見ると髑髏はみすぼらしい格好をしていた。仮面にしか今まで目がいかなかったが、服はボロ布同然で、黒い汚れが袖や腹のあたりにこびりついていて、それでも、新太は努めて気にしていない様子で、髑髏が背を向けるのを待った。髑髏は中をちらりと見た。弥生を見たのだ。その瞬間、新太は髑髏に殺意を覚えた。まるで、この世界に存在している人間が新太と弥生、髑髏だけであるように三人は黄金の三角形を形成している。一人が欠けた瞬間に大変なことが起こる。それは食料をもらっている新太が一番知っていた。新太は髑髏をまだ葬ってしまう訳にはいかなかった。髑髏がどこから食料を調達しているのか、それさえわかれば。だが、あの暗い道を気付かれぬ程離れて付けることは不可能だ。髑髏は新太に怯えたように走り去っていった。弥生が歓声をあげた。「あった。あったわ」一つのとても小さな箱に赤い卵が入っていた。新太はじっとそれを見ると、「食べられるのか？」と聞いた。それ程腹が減っていた。弥生は軽蔑するように新太を見た。そして、大事そうに懐に卵をしまうと、食事を始めた。新太も食事をした。味は良くない。今まで、こんなに味の悪い食事は食べたことがない。新太は髑髏を恨んだ。恨めば恨むほど、食事はまずくなった。新太はやがて、眠るために寝転がった。弥生は鼻歌を快活にならしている。とにかく、ここに帰ってきた。帰ってきたんだ。新太は久しぶりの家を十分に慈しみながら、眠りについた。弥生の鼻歌は夢の中まで響いてくる。そして、そのメロディは新太の記憶の奥底にしまいこまれた。

新太は熱を感じて飛び起きた。近くに弥生が寝ているのを新太は見て、驚いた。骸骨の干からびた姿を見たと思ったからだ。しかし、弥生は魅惑的な肉体を持った一人の女性として、紛れもなく深い眠りに落ちていた。新太は許されることなら、弥生の唇に口づけをしたかった。身をかがめて、顔をそっと弥生の顔に近づける。時間が急激に乱れ始めていた。弥生の呼吸のリズムは信じられない程早く脈打ち、次の瞬間にはゾウガメの動きのように緩やかな動きに変わっていた。新太は叫び声をあげそうになった。激しい痛みが胸を突いたからだ。だが、体はいつもと変わらぬ様子で、新太の視界にとどまっていた。どうやら、胸の痛みは内部から来るものらしかった。それでも、彼は夕闇から夜の変化を厳かに告げる司祭と同じように、儀式的な接吻をしようとした。唇と唇は放射状に一方は愛情、もう片方は死臭をまき散らしながら接近している、次の瞬間、重力に引き寄せられ落ちる隕石同然だった（隕石程早くはないが、時間間隔の消失した世界では速度など意味をもたない）新太の顔は止まった。それは氷づけに保存されたナウマンゾウの完全な巨体の持つ鈍重さを含んでいた。弥生が一言呟いただけで隕石は動きを止めたのだ。その音の空気を伝わる速さが光速を超えていたのかもしれない。そうすれば、全ての説明がついた。法則が腸のように捻転し、とぐろを巻いた蛇が尻尾から己の体を食ってしまうごとくに、崩壊を始めていた。弥生の発した空気の振動は確かに、新太の耳の奥に届いた。「皐月はまだやれ

ます」語尾は正確かはわからない。何故なら新太は「やれるよ」とも「やれる」とも聞こえたからだ。意識の中で、音が変質を遂げたのかもしれない。でも、大方の意味をつかめば問題はなかった。新太は一人、弥生の寝ている場所から離れて真っ暗な外の景色を窓から見た。『皐月とは誰だろう。ましてや、この女性はなんという名前なのだろう？』それが新太の心の声だった。そう。新太は弥生の名前を知らなかった。聞いても聞かなくても勝手に名前をといるものは意識から昇ってくるものだ。そう、言ったのは新太の父親だった。そうやって新太の父親は新太の名前をつけたのだ。誰に相談するこもなかったろう。

やがて、弥生が目を覚ました。いつもの決まり事のような些細な出来事が乱れつつあるのを弥生は発見した。それは新太が先に起きたということだけではない。新太が外を見ていることだけではない。もっと、根源的な存在の質とでもいうものが、回転し最早元の原型に戻らないことをありありと示していた。新太は「おはよう」と言った。弥生は片腕を動かそうとした。しかし、失敗した。代わりに中指だけを立てることになった。新太は弥生の中指が何度も跳ねては床に落ちるといふ行為に興味深そうに見ていた。外は相変わらずの暗闇だったから、外を見るよりは気が紛れるに違いなかった。でも、人はトンネルをくぐる列車の窓から暗闇を見てしまう。同じことが、新太にも起こっていた。しかし、窓には新太の顔も体もまったく映らない。弥生が立ち上がった。今度は上手く立てた。足は腕とは別の神経回路でできてきるらしい。もし、新太が後ろを振り向いて、窓の暗闇を見ていたならば、弥生の姿が鏡のようにはっきりと現れているのがわかったろう。新太は気づかずに、窓から離れた。新太は弥生を情熱的に見た。弥生は新太を冷めた目を見た。決して知ることのない弥生の気持ちを新太は知りたいと願った。かといって、自分がその榮譽に適うだけの男であるとはどうしても思えなかった。さつき、卑怯にも寝ている弥生に口づけをしようとした事実一つとっても新太は自分を悲観していた。絶望的な平凡さを備えた彼は弥生に次元の違う愛情を間違って持ってしまった一匹の蠅だ。弥生は蠅に食事を提供し、導くだけの完全な人間。新太が考えれば考えるほど（もっといろんな例えが彼の心には渦巻いていたが）その図式は変わらなかった。

スタジアムでの出来事は家に戻ると、まるで霧のように弥生の頭からも、そして新太の頭からも抜け落ちてしまっているようだった。二人の敵対的図式は激しさを増した。愛という偉大なる感情は男女二人だけの生活を残酷に壊していく。弥生は新太が求めれば、如何なることも許したろう。ただ、新太が口に出すことはなく、行動を起こすこともないと知っていた。要するに二人の均衡は永遠にそのままのはずだった。しかし、新太はどうしても弥生の寝言が気になった。もし、口にしてしまえば弥生の秘蹟のような過去が明るみに出るということはまったく新太は知らなかった。弥生自身も新太にそんな力があるなどとは考えさえしていなかったろう。しかし、新太は口にした。これはすれ違う法則の糸と糸の掛け違いが起こした一つの奇跡だったろう。

「皐月って誰？」

弥生の目が見開かれた。止まっていた体の動きが激しく震えはじめた。新太は言った瞬間に、その言葉を熟考して言ったのではなく、吐いたことに後悔した。少なくとも弥生の反応から『サツキ』という言葉は、何もない部屋で、何もない感情で言われるべきことがらでないと気づいたのだ。しかし、言葉は発せられた瞬間に力を持ってしまう。弥生は狂った音程の声で語り出した

。「私の本名よ。でも、あなたはその名前を呼んではいけない。その名前は遠く捨ててきた過去と同じものだから。腐食した土に住む微生物が食い、まったくの真空となってしまった意味のない過去。それを、あなたは何故今掘り返して、私の前に突きつけようとするの？あなたの質問は私の過去を暴きに來た盜賊のそれよりもひどい。盜賊なら、まだ金のためという目的があるはずだもの。でも、あなたは私にそのセリフを、単なる思いつきとして言った。そして、それに私は答えなくてはならない。そして実際に答えた。さあ、満足かしら？あなたはそうやって人を侮辱して生きていくことを願うならば……」そこまで言うと、弥生は台所に向かった。そこには鍋一つないはずだった。ただ、開閉式のドアを開くと、一本の包丁が入っていた。弥生はそれを掴むと、人とは思えない奇声をあげて、新太に襲いかかってきた。新太は驚いて避けるという発想さえ湧いて来なかった。弥生の包丁の先端は新太の腹に刺さった？いや、刺さらなかった。包丁は新太を飛び越えて、壁に刺さった。何が起こったのか新太にはわからなかった。弥生は憔悴しきった表情で、ぶつぶつと独り言を言っている。「髑髏の助力が」「聖体の加護を」「過去の汚物」聞き取れたのはこの単語三つだけだった。新太は弥生の体が、自分の体をすり抜けるのを、不思議な感覚（それは、寝ている時に味わう幽体離脱のようなものだったろう）で味わった。まるで、その感情を咀嚼するように新太はズボンに射精した。その瞬間目が覚めた気がした。今度のことは全て夢で、新太はただ、夢精しただけだったのだ。と、思おうとした。でも、弥生は壁に刺さった包丁をじっと見つめている。新太の方を決してみようとはしない。新太は黙って洗面台に向かった。ズボンを脱いで、パンツをおろし、下半身だけ裸身になると、パンツを泣きながら洗った。玄関で物音がしたようだった。髑髏がやってきたのだろう。人の話し声が聞こえる。内容はわからなかった。それだけに一層猜疑心が募った。弥生は、この世のものではないのか？新太の考えはどちらかが既に死んでいるという陳腐な結末だったが、パンツを洗う現実感と、交わった時の感覚は確かに、原始的な快感の本能を含んでいた。あれは生きていないもの同士、一方が生きていないとしたならば、決して味わえないものだ。濡れたままのパンツを無理やり履いて、弥生の元に戻ると、弥生が無言で新太にビニール袋を渡した。中はゴーヤを敷き詰めた白米だった。しかも、白米には味がついているらしく、醤油味が染み付いていた。

それから、二、三度（記憶が曖昧だが）スタジアムに行き、同じことを繰り返した。それから、後、髑髏と弥生が逃げ出した。だが、新太は平気だった。髑髏と新太は同じ人間なのだと感じたのだ。髑髏は弥生と正真正銘に触れ合える新太だったのだ。新太は無限に繰り返す存在の定義に苦しみながらも闇の中を如何なる五感も持たずに泳いでいく原始生物のように世界を生き抜いていくことになる。物語はまだ序章である。

二部『新太と弥生の冒険（世界崩壊の始まり）』

さて、脱殻となった新太は置いておいて、話を弥生と髑髏に戻そう。二人はアパートを出て、歩き続けた。スタジアムとは反対の方向、そして星たちの輝く闇とも違う方向に。先導役は弥生。生まれつきの水先案内人のように弥生は振舞っている。ただ、その目は生き生きと希望に向かっているというよりも、今まで新太と暮らしていた時と何ら変わり映えのしない表情をもっていた。髑髏は尋ねた。「どこへ行くんだい？」髑髏は決められた法律を無視しているわけでは

ない。もう一人の新太、つまり主演となった髑髏は戸惑っていた。その言葉を法則ではなく、今では法律という程に弱くなった弥生の権威に挑戦した。弥生は無言で歩き続けた。これまでの弥生であれば、質問に答えざるをえなかつたらう。しかし、髑髏が法律を破ったのと同様に弥生も犯罪者となった。二人の存在はもはや、極めて世界から孤独な存在であり、鼓動さえも通報装置の作動と同じだった。やがて、道の先に光が見えてきた。以前のnew太と弥生のペアでは決して辿り着くことの出来なかつた光り。光りは巨大な球状のものから発している。それを見た髑髏は球状のものので体の知れなさに恐怖した。弥生は平然と見つめていたが、内心は予測のつかない展開への期待と恐れが同時に同居していたことだらう。髑髏は弥生に促されて、仮面を脱いだ。仮面からはnew太と同じ顔がでてきた。気になる違いは黒さのみ。髑髏の顔は黒かつた。髑髏はnew太のように光の前にいてよい存在ではなかつたことを物語っている。ただ、弥生が選んだ髑髏は紛れもなくこれからの主演になるはずだ。暗い顔は光りに照らされて明るく朱色に染まつた。次の瞬間一塵の風が吹き抜けた。球状の物体から放たれた圧力を髑髏はしっかりと受け止めた。弥生の髪がなびいた。次の瞬間、弥生の髪はどこまでも伸びていき、一匹の蛇となつた。髑髏はそれに気づかずに、まだ光を見ていた。弥生の髪のも先から延びる黒色の蛇は髑髏を狙っている。弥生は声をあげる。「危ない」しかし、髑髏は蛇に食われるより早く光に吸収されていた。蛇は口内に空気だけを吸いこんで、すごすごと元の場所に戻るかと思われた。しかし、弥生のように貪欲な蛇は光の球をも飲み込もうと、口を大きく開けた。下顎と上顎の角度が百八十度を超えようとする時、蛇は球に噛み付いた。その瞬間である。風船の弾ける音がして、光は消え去り、蛇も消えた。弥生の髪は元通りになっていた。髑髏は？ 消えた。弾けた時の力が髑髏をどこかへ連れ去つたのだ。弥生は困惑した。自らの使命が、ここで終わつてしまつたのだから。

その時である。天上から巨大な階段が伸びてきた。弥生は思わず叫んだ。「あいつがやってくる。私を苦しめるあいつが！」弥生は頭を抱え、うずくまると、やがて、辺りに足音が響いた。弥生はまだ顔をあげない。震えながら、目をつぶっている。機械のような無情な声が辺りに響く。

「よく聞きなさい。弥生。髑髏、いやnew太と呼んだ方がいいかもしれない。new太は、遠い世界に旅立つた。お前に残された時間は五日だ。期限内にnew太を遠い世界から、この世界に連れ帰ってくるのだ。幸い手がかりはある。お前が置いてきたnew太の脱殻だ。new太は以前のnew太ではない。気をつけるがいい。だが、再び会つた時、new太は髑髏と一つになろうと、髑髏を探し出す。泣くな。お前が悪いのではない。お前は傍観者の地位を捨てたのだから、その代償はある。new太との接触の結末はnew太の片割れの元世界への帰還なのだからな。もう一度、あの世界に行け。お前が生まれた世界にだ。そしてnew太を連れ帰るのだ。お前の生まれはここではない。しかし、new太の生まれはここなのだ」

弥生はいつの間にか泣いていた。声のする方に目を向けても強烈な光がそこにあるだけだった。何も見えない光はそれだけ言うと、弥生を包んだ。弥生は再び、光をまとい駅へと歩き出した。駅には誰もいなかった。ここから、別の世界へ行くものは限られた者なのだ。それを知りつつ弥生は常に光のある異世界への道を苦難の道と捉えていた。二〇一一年が終わろうとしていた。まもなく二〇一二年がやってくる。新年に人のせわしなく行き交う世界。そして、人が生き続け

ている世界に踏み込むことに暗闇を見たのは弥生だけだったろうか。新太の姿が見えた。彼の足取りはどこかぎこちない。千鳥足のような歩き方を弥生は笑った。髑髏と逃げてから久しぶりの正の感情だった。新太は駅のホームに上ると、弥生の横に立った。「置いていくなんてひどいじゃないか。僕は君とともに、髑髏を探しに行くんだね。あの世界へ。僕のいた世界へ。ここは楽しかったけどそろそろ飽きたところだった。君ともっと広い世界を旅したいところだったんだ。不思議なんだ。歩き始めると、前はちっとも見えなかった駅の蜃気楼がはっきりと見えるんだね。後は幻かどうか確かめるだけだった。実際、幻じゃなかったけどね。蜃気楼なのにだよ？信じられるかい？」「饒舌になったみたいね。負の部分はすっかり髑髏に持ってかれたみたいね。あなたに残っているのは楽天的な部分と良かった記憶だけみたいね。そう。あなたは何を言っているのかわからない。聞かないで。聞いても答えないけどね。聞くことは意味のあることじゃないわ。答えない人間を前に質問するなんて無駄な徒労はよすことね。飽きたと言ったわね。私といるのに飽きたなんて、よく言えたものね。弁解は聞きたくないわ。もし、私を手に入れたいと望むのならば、あなたは私と髑髏を探さなければならない。そして髑髏は仮面をとっている。そして、その顔はあなたと同じ顔。わからないでしょうね。でも、それがこの世界での事実なの。世界と世界を結ぶ法則は時に残酷な事実を与えるものよ。さあ、電車が来たわ。行きましょう」弥生の言葉通り、今度は列車ではなく、綺麗に整備されたピカピカの電車がやってきた。中には誰も乗っていない。自動でドアが開く。二人は乗りこむ。ドアが閉まる。二人は車内の空席に座る。（もっとも全てが空席だった）電車は動き出す。音は静かだ。揺れもない。新太は座席で貧乏揺すりを始めた。弥生は横目でちらりと見ると、手で新太の足を制した。新太の足はそれでも止まらなかった。まるで、ホッピングマシンのように、上下を繰り返していた。だが、さすがは弥生の手といったところか。揺れは止まった。新太は不思議なことに今度は弥生の体がすり抜けもしなければ、性的快感も与えなかったことに落胆と安堵を感じていた。新太は弥生の言葉を半分も理解していなかったが、これだけはわかった。『世界が元に戻りつつある』

「新宿～。新宿～」

電車が止まった。ここは完全に前の世界だ。そして、新太のいた地獄だ。だが、新太はそのことを思い出していなかった。新太は半分だったからだ。弥生は白いピンクのスーツをいつの間にか身に着けていた。そして、新太は通勤途中にきていた紺色の背広を当たり前のように着ていた。「行きましょう」弥生は言った。新太は何も聞かなかった。でも、どうやら、新太の職場に向かっているらしいことは想像できた。仕事場に弥生を連れて行くわけにはいかなかった。「待ってくれ。君。ちょっと」弥生は新太の声を無視して進む。弥生の尻をただ追いかけるだけの新太は惨めだった。

会社は新宿駅から東に200～300mのところにある。商社といえば聞こえはいいが、新太はまさしく雑用係りAとして会社に勤めていた。Bは太った門脇という男。Cは新入社員の綾瀬である。一番の古株である新太を人々は軽蔑をこめて雑用課長と呼ぶようになった。最初、新太は雑用社長と影口を叩いていたものが数名いた程度だったのだ。しかし、それを聞きつけた会社の社長が社員全員の集まる朝礼で、社長というのはけしからん、と怒鳴ったものだから、次の日、いやその日の朝から新太は雑用課長という有り難くない名前を頂戴することになった。会社の雑

用は忙しかった。残業も日に4時間を超える時もあったし、この会社には有給休暇というもの
はまったく存在を根本から無視されていた。そして、残業の分だけお金は出るものの、基本給の
低さによって、かろうじて人並みの給料を貰う。それが新太の会社勤めの全容であった。同期の
島崎というやり手は既に、真つ当な課長職についていたし、他の同期も仕事をもらって商社の礎
になろうとしていた。そんな中、一人、まったく業務外の所謂『誰でもできる仕事』を任された
のだから、たまったものではない。日々、若い社員にもこき使われ影で嘲笑されているためか、
新太は出勤が苦しくなっていた。そして、弥生と出会い、人生は変わったかに思えた。し
かし、変わるはずもない。新太は遅刻して、商社の一階に女連れで乗りこんだ。新年というこ
ともあり、会社には数人のどうしても外せない用事を抱えた同僚がいた。鉄筋コンクリートで造ら
れたビルのエントランスホールでは受付係りの女性とガードマン二人が立っていた。

「ぎつ・・・佐藤さん。ようやく出勤ですか。ご苦労さま」

ガードマンの一人は言った。鼻が微妙によじれた男だった。もう一人の男が弥生をじろじろと
見た。弥生は二人の存在をまるで無視している。

「佐藤さん。この女性どなたですか？外部の人を入れるには前もって連絡してほしいんですけ
どね」

「彼女はここに残る」僕は当然のここのように言った。だが、彼女は僕とともにエレベーターま
で進む。ガードマンは止めようと弥生の肩に触れた。肩は紛れもなく、掴まれていた。新太は声
をあげる。ガードマンの肩がいびつに（彼の鼻のように）曲がっていたからだ。もう一人が傷つ
いた男に駆け寄る。弥生は既にエレベーターに乗り込んでいた。「行くわよ」弥生の声は短かつ
たが、意志のこもった声量だった。少なくとも、この世界のどんな人間よりも。新太はエレベ
ーターに乗り込むと、6階を押した。そこが新太の定位置だった。普段は倉庫として物品が置か
れていたが、倉庫の中に一つ机が混じっている。新太のワークデスクである。数ヶ月前に仕事を
終えたままになっている表面を見ると、側に誰か立っているのに気づいた。弥生はこの階に入
った時から気づいていたらしい。じつと、一点を見つめ、その先には髑髏がいた。新太と髑髏は見
つめあった。程なく、ガードマン4人が6階にやってきた。「動くな」「警察につきだしてやる
」弥生は平然としている。髑髏が動き出した。新太たちがいる場所を迂回するようにガードマン
近づいていく。ガードマンたちは髑髏に気づかない。そもそも、彼らに髑髏は見えていないら
しい。なるほど。新太は一人納得した。だから、髑髏は会社に入れたのだと。髑髏は非常用階段
のドアをすり抜けて、その先に消えてしまった。弥生はガードマンたちに目もくれずにドアの方
に向かう。新太も続こうとする。だが、ガードマンたちがそれを許さない。彼らは皆仲間を痛め
つけられたことにより興奮していた。弥生が一人違う紺色の制服を着ているガードマンに近づ
いた。実際にはドアを目指して歩いていただけだったが、ガードマンは弥生がむかってきたよう
に見えただろう。ガードマンは今度、全力で棒のようなものを弥生に振り下ろした。容赦など微
塵もない。まるで、彼らが幾日も当たり前のように人を打ってきた種族であるようにためらいも
ない。4台の打棒機械と化したガードマンたちの攻撃が止むと、弥生はうっすらと切れた唇から血
を流しながら、笑った。新太は弥生のこんな嬉しそうな笑顔を初めて目にした。ガードマンが怯
んだ瞬間、弥生は正確にガードマンの体の左胸を突いた。掌底といったほうがいいだろう。その

圧力は確かに内部に脈打つ心臓に届いたようだ。ガードマンはゆっくりと背中を地面につけるように倒れた。倒れた男は吐血している。そして白目をむいている。

「この世界では無茶はできない」

弥生は宙に視線を彷徨わせて呟いた。三人のガードマンは我先に、と逃げ出した。弥生にとって幸運だったのは、彼らが格闘のプロではなく、素人に毛の生えた程度だったということだ。もし、本気で三人が弥生を捕まえようとしたならば、弥生は程なく取り押さえられていただろう。新太は暴力の持つ恐怖に震えながら、それでも情夫のように未練たらしく弥生の後についていった。非常用階段のドアを抜けると、影は上に行ったとも下に行ったともわからなかった。弥生は新太に尋ねた。新太は新太のいつもの行動を語った。上にはほとんどいかない。つまり、髑髏も下に行くはずだ。二人は下に急いだ。一階まで行くと、さっきのエントランスホールに出た。受付の女の悲鳴があがる。弥生に気づいたのだ。ガードマンたちは、会社の上役に相談するかどうかでもめていた。警察を呼ぶ判断さえ自分たちではできない雇われ者の悲しさだ。髑髏はビルの外からこちらを見ている。静かな目だ。そして、悲しい目だ。「行くわよ」弥生が言った。

(行った) 新太も外に出た。髑髏は歩くでもなく、何かを教えるようにポツポツと視界に入ってきた。髑髏の歩いている姿は目にできない。髑髏を追っていき、立ち止まると、髑髏は二人の前に姿を現した。

会社では結局、一人の人間の責任ということにして、全てはまるく収まった。そして、その一人は解雇された。すなわち新太である。ガードマンは重症だったが、死んではいなかった。

髑髏は新太の家に向かっているらしかった。上野のある北東の方角に必ず現れた。弥生が膝をついた。ガードマンにやられた傷が痛むらしい。新太は肩を貸し、二人は追跡を続けた。

二人は新太の家である上野のマンションの前に立っていた。弥生は花壇の花の方を向き、そこに倒れている一人の浮浪者に近づいた。浮浪者は垢だらけで恐らく何日も風呂に入っていないだろう。皮膚は赤黒くなって病気にかかっているのかもしれない。病院に行く宛てもなく、大都会東京をさまよう姿に新太は、これからのことを考えた。もし、弥生に一人置いていければ、また会社勤めの日々が始まるのだ。(この時、新太は自分が既に解雇されているとは知らなかった。解雇通知が来るのは3日後だった。もっとも、その時新太は家にはいなかったのだが) 弥生と新太の磁力は異世界へとつながる糸(その糸は目に見えない。それでいて太い)を強化するように作用した。弥生にとって新太がいかなる存在になったかはわからない。ただ、弥生は新太を欲していた。正確にいうと新太の影である髑髏を。それは弥生の使命とも関係あるようだった。弥生は浮浪者を見ながら、父のことを思い出した。散々、幼い弥生を殴った。そして、最後は野垂れ死んだ。いや、あれは母と共同戦線をはって父を追い出したのではなかったか。父は鍵を持っていなかった。あれは冬の寒い日だった。雪が降り始め、ニュースでは大雪になるだろうと言っていた。夜の九時頃、父がドアを叩く音が聞こえた。二人は布団にくるまって寝ていた。弥生は目を覚ましていたが、起きるのがだるかった。誰であれ、玄関まで出ていくのが煩わしいのに、まして自分たちを殴るだけの男の出迎えなど吐き気を催すことだった。母は寝ていたのかもしれない。寝ていなかったのかもしれない。母は静かに、そして動かなかった。そして、三〇分ほどドアは叩かれたが、やがて静かになった。諦めて近所の居酒屋に飲みに行ったに違いなかった。

次の日の朝、居酒屋へ行く道の途中で、心臓発作で倒れている弥生の父を近所の人が見つけた。母は何も言わずに父の遺体が火葬されるのを我慢していた。葬式の費用は二人にとっては痛手で、ただでさえ、稼ぎ手を失った家は困窮に瀕していた。「今日からお前は皐月でなくて弥生よ」母は葬儀場からの帰り道で弥生に言った。その日から父のつけた名前は抑圧の象徴であり、怯えの象徴だった。そして、弥生は新たな人間として脱皮した。その父が何故ここに？弥生と母が捨てた父の骸が何故ここに？弥生は花壇に刺さっていたプラカードを引きぬき、眠っている浮浪者めがけて。しかし、行動は阻まれた。新太が黙っていなかった。珍しいことに何もできないと思われていた弱虫の男が弥生を止めた。後ろから羽交い絞めにしている。新太は思ったより自分に力があるのに、この時気づいた。「やめるんだ」白い息とともに新太は弥生に語りかけた。弥生は我にかえったように、浮浪者を一瞥するとプラカードを投げ捨てた。弥生が見た浮浪者は確かに父だった。紛れもなく。ただ、新太に止められてからは、浮浪者はどうでもいい『誰か』となった。

マンションの中に入って、エレベーターに乗ろうとすると、エレベーターの前には点検中と書かれたプラスチック製の四角の黄色い標識が置いてある。「これじゃ使えないわ」弥生はがっかりして言った。白銀の箱は動きを止めて、中に人が入っているのか入っていないのかもわからない。閉じこめられた人の声を決して外には漏らさない鉄牢を思わせる。新太は弥生がエレベーターを一種特別な機械とみなしていることに、ようやく気づいた。会社でエレベーターに乗った時、弥生の足はエレベーターの振動のせいかわからないが確かに震えていることに気づいた。彼は当初気のせいだと思っていたが、弥生が自動昇降機を見る時、同じように足が震えるのに気づいてしまった。弥生はエレベーターにどんな感情を抱いているかまではわからない。ただ、新太は想像した。恐らく、文明もほとんどない世界で暮らしてきた弥生にとって物とは世界の法則を含むものだったに違いない。決して、人間が動かすものではないのだ。二つの世界を行き来した経験から見出した新太の勘は半分外れ、半分当たっていた。弥生はエレベーターに恐怖していた。そしてエレベーターに恋をしていた。弥生にとってエレベーターの君というべき人がいるのだ。弥生の過去を何も知らない新太は内心歯噛みした。階段を上る弥生のスカートから覗く足は白鳥の首のように白く美しかった。時間にとって弥生は固定された存在とでもいうように新太にとって美しく輝き続けている。気づくと弥生が新太を見ていた。階段の上から下へ見下ろしている。新太は「え？」と答えた。弥生は鋭い声でもう一度聞いた。「あなたの家は何階？」新太は即座に答えた。階はまだ上だった。弥生の白い足を追ってまた上る。新太は自分がいつから足フェチになったのかと疑った。だが、それは杞憂だった。新太にとって心地よい間隔をとったとき必ず視線が弥生の足に行く。それが事の真相だった。やがて、目的の階に着く。新太と弥生が到着すると、髑髏がいるのが見えた。「いたわ」弥生が冷たく言った。まるで小動物を狩る猟師だ。その手法は壁画に描かれた狩猟をする神々の一場面を思わせた。髑髏はずっとドアの中に入っていった。髑髏は明らかに新太を挑発している。新太のこの世界での足跡を全て消そうとでもいうように動いていた。この時はまだ会社を辞めさせられたことを知らない新太は、そんなこととは露知らずに、ただ、髑髏は何故自分と似た風貌をしているのか？そして何故自分と関係のあるところに行こうとするのか謎だった。しかし、弥生にとっては自明のことだったらしい。全ては円環の木

の成すままに、と弥生は一人念じた。あの光の存在。弥生に語りかけた光の存在は無数にこの世界にも散らばり、弥生を監視しているという圧迫感を胸に抱きながら弥生は新太から手渡された鍵でドアを開けようと鍵をさしこむ。ピン・ダンブラー錠をガチリと音を立てて合わせり、ドアが開けられた。ここは終着点なのだろうか？弥生の脳裏にふとそんな考えがよぎった。中はひんやりと冷えていた。冬に暖房をつけてない部屋の寒さ。弥生と新太は部屋の中に足を踏み入れた。まず廊下を進むと風呂場と洗濯機置場がある。そして、そこをさらに進むと部屋が二つ左右にある。そして、一番窓側にキッチンがあった。弥生は疑問を感じた。一人暮らしの若い男の家としては広すぎる。ただ、弥生は新太を高給取りの若者として片付けた。弥生は全てを知っているようで何も知らなかった。この世界の新太の生活についてだ。髑髏はどこにもいない。二人は二つの部屋を見回し、風呂場を開け、キッチンを見た。けれども、髑髏はどこにもいない。二人はリビングで顔を合わせ、口を開いた。「髑髏がいらない」二人はベランダに通じる窓を開けた。髑髏はベランダの隅で体育座りをしている。弥生は新太には見せない優しい顔をみせた。「どうしたの？さあ、帰りましょう」髑髏は何も言わない。ただ、立ち上がった。その時、強い突風が吹いた。風に混じった髑髏は黒い影となって、新太に襲いかかった。

気持ちは暴風となり、豪雨は心の無意識を濡らし、精神の頑強さを瞬く間に取り去ってしまうブルーザーが蠢いている。建築作業車は基礎をしっかりと固められた上に建つ一軒家であった心を巨大な鉄球でバラバラに解体し、残った残骸を、速やかにトラックに取り運びさってしまうと、綺麗にコンクリートを敷き詰めた駐車場を造った。あらゆる手段は行った。それでも、地面に残るわずかな凸凹はかつて、立派に上にもついていた建築物（家）を思い出させた。駐車場となった心はあらゆる種類の車両をうけいれる準備をしていた。馬鹿げた大きさのダンプカーも入れる。優れた一般車の86も入れる。日産の軽自動車も入れる。自転車だって置ける。車に限らず、駐車場はただ一つの用途を除いて完全に汎用可能だった。結局、何も運び入れられずに、2週間の月日が経った。一人の散歩人が、そこにゴミを捨てた。赤いコカコーラー社の空き缶だった。駐車場には歪な構造を持ったアルミの円柱の物体だけが、風の波を受けて、カラカラと音をたてて日中も夜も絶えず存在していた。空き缶からは、やがて芽が出始めた。無機物であるアルミの養分を吸ってできた木は無木と呼ばれた。誰が名付けたかは知らない。きっと散歩していた人間がつけたのだろう。だが、無木が大きくなる頃には近くを通りかかっていた人間も姿を消した。巨大になった無木に一つのウロができ始めたのは、一年後だった。ウロは人間がすっぽり入るような形に成長を続けた。そして、ある時、一人の人間が入りこんだ。誰も住めないはずの場所に住める女。時は3月から4月になろうとしていた。木の上で古代の王朝人が和歌を詠み始めた。『弥生の日 父の捨てし缶 臯月を受け入れ 穴となり果て』王朝人たちは再び過去に戻っていった。

逆転写酵素（後）

新太が気づくと、弥生が目の前に、憂鬱そうな目をして立っていた。髑髏はもういない。新太は弥生を受け入れる準備が出来ていた。新生した心は巨大な底なし沼となって弥生を飲み込もうとした。弥生は本能的に感じている危機を自分の心が支配されぬ方向にねじ曲げた。新太の夢は夢どまりになった。いつでも弥生を皐月として受け入れる準備はできていた。ただ、弥生は皐月であることを拒んだのだ。二人が一緒になる日は来るのだろうか。結婚や、セックスといった俗世の感覚、肉的な世界から真性の融合というべき、現代人から見れば奇怪な現象へと到達する日は来るのだろうか。弾かれた弥生の心は消息不明におちいりそうな子供同然だった。新太の新生が弥生をそこまで弱らせた。弥生はけだるそうに、ベランダから屋内に入ると、東の部屋にある寢室のベッドに倒れこんだ。新太も金魚の糞のように弥生の後についていくと、リビングのソファに倒れこんだ。二人は久しぶりの眠りを味わった。東の間の休息といえるかけがえのない時間を二人は寝て過ごした。もう、一つになってしまった髑髏と新太は世界にとって危険な存在、そして貴重な存在へと変貌を遂げていた。巨大な再生を象徴する神話の卵は、眠ることによって孵ろうとしていた。まもなく、神話の時代が幕開ける。この世界と異世界は一つの世界として融合をはじめ過去と未来を次元の違う曲解へと導くのだ。呪縛を整えし魔術師たる弥生の運命は死が約束されていた。紛れも無い真実が新生した新太によって引き起こされた新生しつつある世界にはあった。それは、どちらかが命を落とさなければならず、新太の死は世界の崩壊に繋がるということだった。不可思議な影のように新太に付き添ってきた教導者としての弥生は、こんなにもか弱い存在だったのだ。間違いなく新太が、主人公であり、弥生は脇役に過ぎなかった。だが、弥生は光る脇役としての地位をまざまざと見せつけることになるだろう。二人の眠りは世界二つの別れの涙であり、合一することの感情的爆発を含んでいた。新太は夢を見た。久しぶりに見た父親の後ろ姿はもはや、人の形をとどめていない。それでも、新太はそれが己の父親であるとわかった。DNAの共鳴とでも言うべき現象を確かに感じ取ったのだ。父親は新太に厳かに告げる。「お前の代わりはいくらでもいた。だが、今、お前はかけがえのない世界の一部となった。私が割いた世界の統合をするのがお前とは皮肉なことだ。だが、もう私には何の力もない。まもなく敵が現れる。世界と世界の繋がりを阻止するべく、生まれた存在。そう、もう一人の私であり、もう一人のお前でもある影。奴は確かに、いる。重度の心臓疾患の患者の鼓動のように脈うっている。今に奴は手術をうけて復活するに違いない。お前は影の力を消すために、母親を探し、殺さなければならない。これは宿命だ。そら、影が動き出した。奴らは、風のように早く、雷のように鋭い。もし、影との戦いに敗れば、お前は死ぬ。もし、お前が生きたいと願うのならば母親を探せ。そう。お前を誰よりも可愛がり、愛した母親だ。あの母性をお前はもはや必要としない。必要としないものは効率的な世界にとって役にたたないものだ。健闘を祈る。もし、お前が心の弱さを封じられないとすれば、二度と世界は一つに戻ることはないだろう。今は全てわからなくともいい。ただ、お前は母親を探せ」新太が目覚めた時、育ての親である人間の言った言葉がはつきりと記憶に残っていた。弥生も起きてきた。新太は夢の話をもっと聞きたかった。弥生は短く言い切った。「探すしかない」新太にとって弥生は、父親の語った物語の中のどんな役割を

含んでいるのか謎だった。父親は何も言わなかった。影の存在は新太を死の恐怖におとし入れた。新太は父の姿の背後にはつきりと生まれつつある邪悪な影の姿を確かに見たのだ。自分の影を殺すことはできても父の影を倒すことはできるのか？疑問が頭をかすめた。迷いこんだ森の中で、一人助けを呼ぶ子供時代を思い出した。あの時は母が助けてくれたんだった。ところで母はどこに？新太は以前に送られてきた母親からの封筒を見た。島根県出雲市。そこにはただ、それだけが書かれていた。

次の日の朝、二人はコンビニで買ったサンドイッチをほおぼりながら、新幹線の東京駅に急いだ。上野の駅は人々で混雑していた。そこにはまるで、二人のことなど全く眼中にないとも言わんばかりに、人々は日々の生活を送っていた。切符を新太のお金で買おうと、二人は島根県の出雲市行きの切符を買った。上野から出雲市駅までの乗車券、東京から岡山までの新幹線特急券、そして岡山から出雲市までの特急券。二人は山の手線で東京駅まで行き、新幹線のぞみを前にしている。売店のキヨスクで弁当を買う。シュウマイ弁当と幕の内弁当である。お茶は『お〜い、お茶』を四本買った。冬なので、喉は渴かないと思うが、念のためである。窓際の指定席に弥生が座った。通路側にいる新太は、もしかしたら以前仕事で大阪に一度だけ行った時、富士山が見えたのを思い出して、窓際でないのが残念がった。ただ、空は曇っていたし、どうせ見えないだろうと諦めた。二人の間に特に会話はなかった。今までと違うのは新太が終始弥生をリードしていたということだ。弥生は気難しい顔をして黙ってついてきた。のぞみは機械音とともに発車した。岡山は終点ではないので、寝る気分にはならなかった。そこで、新太は弥生に話しかけた。「君は何者なんだ？」弥生は獣のような表情で振り向いた。

弥生はスカートのポケットから黄色の折り紙を取り出した。人間のように頭、足、手、胴体がある。大雑把に言うと、黄色以外の表現は見当たらない。だが、新太は紙に小麦の匂いを感じた。あの大きな畑の一面に生えしきる金色の植物たちは風に揺れて、時にうねり、時におとなしく畏まっている。新太は昔住んでいた田舎の風景を思い出し、不思議に思った。紛れもなく、弥生が見せているのはただの折り紙だったのだから。しかも、紙はポケットで肌に密着していたのだろう。微かな温もりを含んでいた。人型の紙をいろんな角度から新太は見た。だが、どこから見ても、黄色の紙だった。弥生は窓の外を見ていたが、新太が紙を扱う術を知らないのを可笑しく思ったのだろうか？微笑を浮かべて、「紙を開けてごらん」とささやいた。指を丁寧に動かし、壊れ物を触るように新太は紙を開いていった。やがて紙は完全な正方形に戻った。そして、黄色の紙の裏には文字が書いてある。『新太と弥生の約束』訳がわからない。しかし、新太は気づいていた。この文字が新太の字だということ。そして、これを折ったのは恐らく弥生なのだ。弥生はゆっくりと語り始めた。「あなたが覚えていないもの無理はないわ。私とあなたは、この世界で行方不明になったのよ。一人は一年後に見つかった。影を失って。最後まで聞いて。そう。あなたよ。そして私は暗い世界に閉じこめられた。でも、それで良かった。あなたがいれば、それで良かったから。私の決められた住居にあなたは半身となって、いつも食べ物を運んでくれた。でも、影には意志がなかった。反応するだけの機械と同じ。動力はどこかにあったのでし

よう。でも、複雑な動きは何一つできない。ただの人形。計らずも、今あなたが解体した折り紙の人形のようにね。そして、あなたと影は今馴染んできている。もうすぐあなたと影は全てを思い出すかもしれないし、思い出さないかもしれない。所詮私はその程度の存在だったのかもしれないわ。でも、驚くべき事実が、ある日、暗黒の世界で“光れる者”から知らされる。それは私が、あなたのために造られた一種の人形だったということ。向こうの世界から来た人形。完全にあなたと補完性を持った人形よ。光れる者にとって、私はその程度の物だった。でも、闇の世界では光れる者が全ての力を握っているわけじゃない。今、私たちがいる世界の全ての人々の俗悪な影もまた、あの世界に閉じこもっている。その影は光を蝕むのよ。そう、あなたの影が私にしたことのように。私は光の使者なの。そして、あの日、あなたを迎えに行った。あの日だけじゃない。いつか、あなたが私と出会えば、私の側に留まるだろうと確信していたわ。だって、敵であるはずのあなたの影でさえ、光である私のために生きる糧を与え続けていたんだから。予想通り、あなたは私についてきた。光と影が交わる領域、場所、時でないとは決してたどり着けない、光のない世界へとむかうために。私は嬉しかった。何も覚えていないあなたであっても、こうしてめぐり会えたんだから。でも、本当いうと、髑髏はいつも仮面をしていたから、あなたの顔を忘れていたの。だから、慎重にあなたが、二つの世界をつなぐ人間か確認した。結果は間違いなくあなただった。私はそれがわかった時、列車の中で、気付かれないように泣いた。そして、私はあなたとあなたの影を見守った。できることなら、私は私を愛していた影と行きたかった。でも、影は所詮、影だった。光によって別の世界に送られたのよ。それから、私とあなたは、いえ、私のためだけに二人は光の世界へと向かった。そして、きっと影の世界ではあなたと影は決して交わらない法だったのよ。そして、光の世界で再び交わった。でも、あなたは私を思い出さない。あなたの中の私の記憶はどこへ行ったのだろうか。私は考えた。あなたは影と交わった後に夢を見た。その言葉から私はひとつの仮説をたてた。影は私の知らないどこかで、影同士で互いに影響を与え合い、その純度を高めていった。深い世界には影の集まる淵があると光れる者は言った。そして、今、淵から恐るべき者たちが蘇りつつある。それは、たぶん、あなたの中にあつた核となる私の記憶。どこまでも輝いていたあの黄金の中で、夢と約束を誓い合った、あの日。弥生の前には新幹線の座席しかなかったが、遠い目（はるか、彼方を見渡す目）をして語った。新太は信じられない、と思った。だが、そう思うだろう彼を見越して、弥生は黄色の紙を出したのだろう。だが、弥生は依然として、重大な部分を語っていないような気がした新太は、さらに質問を重ねようとしたが、頭は疲れきっていた。混乱といってもいいだろう。新太は、影の淵を考えた。はっきりとした形はとらなかったが、恐怖が湧いてくる。喉元に真剣を突きつけられた心境に似ていた。唾を飲み込む。喉を異物が通ったような違和感がする。気のせいかもしれない。新太は自分の感覚が自分のものでない状態に陥った。影との融合は今までの新太を壊そうとしていた。弥生の手が新太の手に握られているのを感じる。弥生は光である、と新太は強く思った。温もりは確かに、自分が存在している根拠となった。そして、新太は思い焦がれる弥生をずっと昔に手に入れていたのだ。だが、何をどうしたかは相変わらず何も思い出せない。だから、ただ、この弥生に対する思いは生来の性質なのだろう。きっと昔の新太が弥生に惹かれたように、今の新太も弥生に惹かれているのだ。ただ、弥生は今の新太を決して受け入れないだろう。弥生の手温かさは未来の、そして過去の新太（記憶を取り戻した新太）に何十倍も強く

注がれていたのだから。

新幹線は岡山駅に着いた。出雲市行きの特急に乗り換えると二人は弁当を食べた。特急はまもなく出発して、出雲市へ向かった。電車の中で二人は無言だった。やがて出雲市に着く。二人は電車を降り、出雲市へとおりたつた。二人はあてもなくさまよう他なかった。だが、駅の少し外れたところで男につかまった。男はタクシー兼観光案内をするモグリの観光業者らしかった。新太にはあまりお金がなかった。ほとんど、切符代に消えてしまっていた。そのことを言うと、男は弥生を見た。弥生の手には一万円札が二枚握られていた。交渉はすぐにまとまった。二万円あれば、弥生と新太は十分に出雲を観光できるはずだった。いや、観光に来たのではなかった。新太の母親を探しに来たのだ。男は笹金と名乗った。笹金は善良そうであり、後ろめたさを持った男だった。二つが同居している男からはどこか異常な雰囲気を受けるものだが、笹金からは感じなかった。新太と笹金は世間話をした。今の総理大臣がどうしたとか。震災の傷跡はまだ癒えないでしょうとか。それこそ、新聞の一面に見る話から三面くらいの記事まで語り終えた頃、笹金は奇妙なことを言い出した。「おかしいな。ずっと黒い車に付けられてるな」最初、笹金は勘違いかもしれない、とすぐ取り繕った。しかし、今度は弥生も気をつけてみると、やはり付いてくる。「付けられてるわ」弥生も言った。笹金は新太のことなど無視して、弥生に聞いた。

「まきましようか？」弥生は無言で賛成した。車は急に速度を増して、急カーブをすごい勢いで曲がった。笹金は興奮した声で自慢した。「これでも昔は走り屋だったんですよ。任せてください」顔は見えなかった。二人を振り返る余裕もなかったし、新太も弥生も笹金の顔になど興味はなかった。にきびが年齢にしては珍しくついていたな、と弥生が気にしていたくらいである。あまりにも曲がり角の多い道路だったので、二人は酔いそうになった。特に新太はひどく気分を悪くした。黒い車はぴったりと笹金の車の後ろに付いてくる。まるで、影のように。とうとう車は止まった。弥生が新太を心配して「止めて」と叫んだのだ。笹金は仕方なく止めた。結局相手から逃げられなかったことを申し訳なく思っているようだった。黒い車も堂々と二〇メートル後方に止まった。笹金は文句を言ってやろうと思ったらしい。運転席から出て、黒い車に近づいていった。弥生と新太は外に出た。ちょうど簡単な展望台だった。いつの間にか山を登ってきていたのだ。辺りには田園風景が広がっていた。笹金の叫び声が聞こえた。黒い車のドアからはのっそりと巨大な体をした坊主頭が姿を現した。笹金は片腕で宙に持ち上げられて呻いている。坊主頭はこちらを見た。虚ろな目だった。

「何者だ。何者だ。お前は何者だ」新太は叫んだ。坊主頭はなお無言である。目には表情というものがない。弥生は叫ぶ新太の前に立ち、危険な香りを放つ男と新太の対角線上に正確に入った。笹金は坊主頭に放り投げられ、力なく転がった。弥生は走った。坊主頭に向かってではない。視線の先には新太がいた。新太は弥生の目を見た。弥生の眼力は新太を怯ませた。その時、坊主頭がいつの間にか新太の後ろにいた。弥生はまた対角線上に入ろうと動く。今度は新太に体をぴったりと密着させている。坊主頭はやっと、そこで口を開いた。物言わぬ沈黙者の声は不協和音のように歪だった。「俺は生まれた。暗黒の淵の息子として、息子は12人いる。私はもっとも早い。もっとも素早い。その分、最も弱い。まもなく、2番目に早い“ゴウ”が来る。俺の名

前は“炎（エン）”ほのおと書く。ゴウの漢字は本人に聞け。俺はお前たちとは戦わない。ただ、他の追跡者にお前たちの居場所を知らせるだけだ。車も運転できる。あらゆる技能は影となった人間たちから得ている。そして、影による融合は特殊な力も生み出した。瞬間移動だ。まだあまり上手く使いこなせない。ただ、少しずつ進歩している。みんなそうだ。少しずつ力を試しながらやってきている。心してかかることだ」新太は心底、この世界が嫌になった。思いを吐き出すように炎にぶつける。「だいたい俺は自分で望んで、そんな宿命を引き受けた覚えもない。俺でなくてはいけない理由もないだろう。全てこれは夢物語なんだ。そうだろう？ そう、言ってくれ弥生」弥生は無言で、新太の方を振り返った。ピシヤリ。新太の頬に痛みが走った。冬の寒い日だただけに、手のひらも冷たく感じる。弥生は真実を見ようとしぬい新太に怒りの咆哮をあげる。「あなたね、いい加減に逃げるのはやめなさい。あなたはいつでも逃げる機会があった。でも、あなたは行かなかった。私を得るために、ここにいる。そうでしょ？あなたは私であり、私はあなたである。あなたが、もし闘わないというのなら、私が闘うわ。それが、私に与えられた使命。影を潰せと教えられたのだから。光が何者かなんて関係ないわ。私は初めて人生で使命を与えられた。そう、ここにいる炎だか、四角だか知らない人間だって、そう。人間は生まれながらにして何らかの使命を背負っている。私は向こうの世界に行くまでは、それが見えなかった。でも、今は見えるのよ。それが何より、嬉しいの。あなたに与えられた使命はもう、あなたしか果たせない。今になって怖気づいても、もう始まってしまったの。動き出した巨大な惑星はもう、誰にも止められない。慣性の法則に従って、動き続けるのみよ。何かに衝突するまでね。私たちに衝突しようとなんだらうと、私たちは12人をぶっ殺し、あなたの母親を探すのみよ」弥生はそこまで言うと、息継ぎをした。無呼吸で喋っていたのだ。そして、二、三度咳き込んだ。炎も言う。弥生とは味方ではないのだが、抵抗しない獲物を倒すのは気が引けるのだろうか？「お前はお前のベストを尽くせ。新太」坊主頭の声は相変わらず新太の脳にキンキンと響く。新太には、これは何か壮大な茶番であって、自分はその大きな芝居の主役としていつの間にか抜擢された人間なのではないか。新太は弥生の目を見た。弥生は強い意志をこもった目で見ている。坊主頭は新太がかかってくるのを待っているかのようだ。新太は諦めたように呟いた。「どこまで行っても追ってくるんだな」「そうよ」「そうだ」弥生と炎双方が同時に言った。新太は冷静さを取り戻していた。「炎といったな。お前は力を持っている。少なくとも、そこに転がっている筐金さんを倒すほどの。それでも、お前の力は弱いというのか？」炎は無言で、頷いた。弥生は何事か考えている。炎と新太を交互に見比べている。「新太。炎を殺しなさい。そうすれば、奴らから逃れることができる。闘いたいの、やまやまだけどね。私たちは使命を果たさなければいけない。そうでしょ？ 炎が言ったことが事実なら、12人倒す必要もないみたいね。さあ、新太。あなたには力がある。あの、バッドを思い出して、あなたは虎を退けた力がある。世界の境界は曖昧になってきている。炎の力が増していると同様に、あなたの力も増しているのよ。あとは力の使い方を覚えるだけ」炎の笑い声が響く。「残念だったな。お二人さん。ゴウが到着したぞ」炎が空を見上げる。二人もつられて見ると、空の中に黒点が見える。「あれはなんだ？」新太が見上げながら、いう。すると、黒点は段々と大きくなり、やがて、人になった。「危ない！！」弥生が新太に飛びかかる。一瞬、何が起きたかわからない。空から人が降ってきた。しかも、今まで新太のいたところに、凄まじい轟音を伴って、頬にノコギリで傷つけたよ

うな傷痕を持った男が地面に着地した。「あわわ」新太は恐怖で、体が凍りついた。今までの新太からすると、常軌を逸した出来事が起こっていた。コンクリートで舗装された道路にはヒビが入っている。傷痕を持った男は話した。「俺は剛。ツヨシと書いてゴウと読む。剛力の剛でもある。ようやく、会えたな、新太。俺はお前の宿敵だ。よろしく頼むぜ。楽しませてくれよな」そう言うと、剛は再び、空高く舞い上がった。弥生は倒れている。足を怪我したようだ。ゴッーと巨大な物体が下降する音が聞こえてくる。弥生が何事か叫ぶ。だが、聞こえない。新太は弥生がこちらを見て、叫んでいるのをぼんやりと見ている。体が動かない。上から、剛が落ちてくる。死？ 新太は初めて、死を意識した。死ぬ？ 俺が？ 何故？ 使命のために？ ふざけるな！ 俺には光と影の闘いなんて関係ない。だが、振りかかる火の粉は払うまでだ。飛んで火にいる夏の虫め。全て燃やし尽くしてやるよ。新太は体をひねると、剛の落下を躲す。再び剛は飛ぶ。躲したはいいが、落下した時の衝撃で、めくり上がった道路の瓦礫が、新太の足を打った。そして、次も足を庇いながら避けた。しかし、三度目の跳躍だ。「死ねー新太」剛が叫びながら、勝利を確信して、落ちてくる。駄目だ。避けられない。新太は祈った。「俺に力をくれ」その時、光が見えた。太陽だった。

新太の体は言い知れぬ力に満たされた。次の瞬間、新太の手には懐かしいバットが握られていた。新太は勢い良くバットを空にかざす。バットは空にそびえる電波塔の先端のように斜めに空を走った。ガキン。鋭い音がする。新太は数メートル先のガードレールに打ち付けられていた。弥生が慌てて駆け寄ってくる。「大丈夫？」声に出したわけではない。弥生の表情は新太を心配するものから、遥か彼方の空を睨んだ。炎もその方向を見ているらしい。二人の視線は出雲市の森に落ちていく黒い物体を追っていた。そして、黒い物体は見えなくなった。炎は背広のポケットから煙草を取り出した。セブンスターだ。上品にライターを胸ポケットから取り出して、先端部分をこする。火の明かりがわずかに、見える。新太は残る敵、炎を見て、にじり寄った。弥生はもはや自分が、この戦いの役には立たないと思っているらしい。じっと後ろに控えている。新太は走った。炎はまだ、煙草を吸いながら森の方を見ている。バットを振り上げ、急転直下に下ろす。重力と腕力のコラボレーションが炎を叩き潰す！ かに思われた。しかし、炎の姿は消えていた。代わりに車が動き出した。あの黒い車だ。逃げるつもりか。新太は全速力で、倒れている笹金の横を駆け抜けた。そして、跳んだ。ボンネットの上に跳び乗ると、炎の驚いた顔がフロントガラス越しに見える。弥生が大声をあげる。車が発進した。後ろに数メートル走って、方向転換をする。不思議なことに他の車は全く通らない。新太は車にしがみつこうとする。しかし、バットを持ったままでは不安定だった。それでも、バットを。唯一の武器を離すわけにはいかない。車は大きなカーブを遠心力など感じさせずに綺麗に曲がっていく。新太にはとてつもない力がかかっているにも関わらず。二度目のカーブ。今度はさらに急だ。気づいた時、新太は道に転がっていた。無数の擦り傷とともに。「逃げられた」新太は道の向こうから走ってくる弥生に言った。「よく戦ったわ。あなたは立派だった。それでこそ、世界をまとめる者よ」新太は必死だった。敵がもういないのを知って。座りこんだ。「終わったのか？」弥生は冷酷に告げる。「違うわ。始まったのよ」二人は笹金の倒れているところまで戻り、笹金に声をかける。笹金は

気を失っていただけらしい。「すみません。私は一体何を？確かお客さんを乗せて出雲大社に行く途中に展望台へと寄ろうと、それが何故倒れているんでしょう？」「難しい話はいいわ。とにかく旅を続けましょう」新太はこの弥生の対応に多いに不満だった。というのも、炎を始めとする12人の息子たちは確実にこちらを追いかけている。炎だって、逃げたのは一時的で、きっとまた戻ってくるに違いない。警察に笹金がされたことを言えば、こちらは圧倒的に有利な状況を作れるというのに。弥生はそんな新太の目を見たのだろうか。展望台について、二人きりになると「警察はあくまで、私たちとは関係ない論理で動いている。どういうことかわかる？敵にもなるし、味方にもなるの。もし、あなたが、剛？剛といったかしら。あの男を殺したとなれば、黙っているものではないわ」「手応えはあった。でも、俺が殺したのは人間ではない。だから罪に感じる必要もない？そうだろ？それに正当防衛だったしな」弥生の目は知的な輝きをいよいよ増した。「人間でないとは言い切れないかもしれない。彼らには温もりを感じた。もしかすると、暗黒の淵の息子たちはあなたの兄弟かもしれないわ。生まれ残った兄弟」新太は動揺した。兄弟？何だって？そんな馬鹿なことがあってたまるか。奴らは確かに暗黒の淵から生まれた人ではないか。特殊な何かなんだ。待てよ。とすると、バットで剛を森までふっ飛ばした俺は？ 弥生は新太の心を読んだように、気づいた新太にさらに畳み掛ける。「そう。あなたも同類なのよ？何が正しくて何が間違っているなんてないのよ。全ては二つの世界の融合という現象の成せる技なの。さらにいうならば、あなたは二人目よ」「どういうことだ？俺が二人目？髑髏が一人目ってことか？」「違うわ。あなたの前にとっても強い人間があなたと同じ役目を負っていた。私と彼は世界を一つにするために戦った。でも、彼は最後の最後で大切なもの、つまり彼の妹の命を奪うことができなかった。だから、彼は失敗した。彼の時は暗黒の息子たちは32人だった。あなたは少ないわ。それをラッキーと思うことね。そうすれば、少しは心が休まるんでしょう？」新太は遙か昔、いや、ごく最近かもしれないが、新太と同じ使命に挑んだ人のことを考えた。そして、自分自身の問いに置き換えた。「俺は母親を殺せるのか？」新太の心は冷えた溶岩のように固く凝り固まっていた。弥生の暖かな手が新太の肩にかかる。笹金が近づいてきた。「そろそろ行かないと、出雲大社を見る前に日が暮れてしまいますよ」新太と弥生は勧めに従い、タクシーに再び乗った。笹金は律儀に今度は展望台を降り始めた。「まずいわね」弥生が小声で言った。「まずいな」新太も頷いた。「気づいている？この世界と向こうの世界の境界はどちらの世界とも違う世界になっているということ？」弥生の声は新太を試すように発せられた。新太は答えを探す生徒のように懸命に頭を働かせた。「だから、他の人間が通らないのか？」弥生は満足したらしく、口を少し曲げて笑った。「笹金さん。あなた死ぬわよ」弥生は前の運転席に座る笹金に不意に発した言葉はあまりにも残酷だった。「ご冗談を」笹金は笑った。ただ、笑った顔のまま頭が胴体から離れて、後部座席に飛んできた。血が飛び散る。「来たか！」新太はバットを構えた。車は道路脇で山の侵入をくい止めているコンクリートにぶつかった。弥生と新太はその前に脱出していた。新太の顔には笹金の血がついている。風が強い。気づいた時、新太は本能的にバットを顔の前に垂直に構えていた。ガキン。バットが押され、新太は道路に転がった。視界のすみに炎をとらえた。「3番目の息子。凧（ナギ）だ。さて、運転手は死んでしまったな。怖いか？新太？」新太の心には怒りが湧いてくる。笹金さんをよくも！ というのではない。敵はどこからでも襲ってくることを予期しなかった自分を恥じたのだ。「来い！」新太は背の高い細

い男を見て、言った。その男が凧らしかった。

筐金という運転手はもういない。千切れた肉体がかまいたちを受けて崩れていた。弥生は筐金の頭を見ている。そして、そつとその頭に口吻を与える。急襲者としてやってきた凧、炎は黙ってそれを見ている。彼らにとって弥生は敵ではないのか？唇が肌に触れ合っている時間はどのくらいか、わからない。ただ、幾ばくかの時間が過ぎ、仄かな光が筐金の肉体に宿り始めた。弥生が何事か呟いている。新太には聞こえない。弥生と新太の距離はどこまでも遠いように感じられる。やがて、筐金の肉体の断片は強い光を放ち終わり、消え去っていく。どこに行くのかわからない。物質がこの世界から消失していくのか、それとも人間の目に見えない姿に変わっていくのか、どちらともこの場にいる4人の人間には判断できなかった。ただ、一つの世界の事実が残る。筐金は光になった。

凧は一步前に進んだ。炎は始めから闘う気がないらしい、道の端で煙草を吸い始めた。3人の対峙さえ見ていない。ただ、炎は慈しむような目で、出雲市の町並みを見ていた。ちょうど下り坂になった道路には、さっきと同じようにまったく他の車も通らない。炎は知っていた。暗黒と光が交わる時、世界はこの世界でもないもう一つの世界でもない変質した世界になるということ。凧は頬を膨らまし、手をグーの形に握り、口にあてた。息の通る穴を拳でつくる。新太はバットを構えた。微風が新太の髪を揺らす。と同時に足元が不安定になる。強力な風が凧のいる方向から吹いている。踏ん張る新太。凧は力を開放するように拳を開いた。新太はバットを持っている。それが、幾分風をやわらげているらしかった。弥生は新太の近くにいつの間にか寄ってきていた。「弥生。君は風がきつくないのか？」新太の問いに弥生は点滅する光で答えた。確かに弥生の体は光っていた。そして、ヒトであることをやめた蛍に見える。新太は弥生がどこか別の世界に旅立ってしまうのではないかと不安に思い、風にも構わず弥生に触れようとする。弥生は新太を受け入れるように手を伸ばす。正確な手と手のふれあいが二人を包む。無視された格好の凧は怒りにふるえて、今度はさらに体で十字架を作るように立つと、「Ω（オーム）」と大きな声を出した。途端に新太と弥生の接触は断たれた。弥生の腕は肘から先が浮いていた。その手を新太が握っている。弥生はさらに強い虹色の光を放ち続ける。断ち切られた肘からは新たな腕と手が生えてきている。新太は弥生の手を慈しむように撫でると、バットをこすりつける。バットは光を弥生の腕から吸収して、輝き始める。新太の中に弥生を傷つけられた痛みが脳の中に屈辱となって反射した。バットを投げる準備はできている。風でこれ以上前に進めないのも、バットを投げるしか手段はない。でも、新太はためらった。唯一の武器を手放して、返ってくるのか。新太はそれでも決意した。敵がまず狙っているのは弥生かもしれない。弥生を傷つけることは新太を傷つけることと同じだ。新太の胸に激しい痛みが湧き起こる。バットは新太の手から放たれた。

ぐんぐんとバットは一直線に暗黒の息子である凧を目がけて飛んでいく。放物線ではない。完全なる直線を描いている。と、後少しで凧に到達する段になって、バットは止まった。凧とバットの間には殺しあう力が働いているらしかった。弥生の光が収まってきた。弥生は言った。「チャンスよ。新太」新太は動いた。走った。炎が相変わらず景色に興じているのを確かめながら、

新太は風に向かって、距離を縮めていく。風はもう止んでいた。風の力は全てバットへの抑止力に使われているらしい。新太は回りこんで、風の後ろに立った。風は首をねじって、こちらを横目で見ている。新太は立ち止まった。何も持っていないのだ。身にあるのは服と靴。そして……。ぼんやり、手を見る。

新太は子供の頃のことを思い出していた。近所には原口という不良がいた。新太はいつも原口に、殴られていた。原口の家は市の経済を支える会社の創業者一族だった。原口は親の見えないところで、会社で働く人間の子供をいじめていた。ある時、新太は原口から万引きをして来いと命令された。新太は渋ったが、鉄拳が飛んできた。泣きながら、新太はとりあえず、ゲームショップの前まで来た。しばらくじっとしていたら、店主が外に出てきて、店の前を掃除し始めた。新太がどうしていいかわからず泣きだすと、店主は「どうしたの？君？」と声をかけてきた。新太が事情を話すと、店主はそれなら、一本ゲームソフトをやろうと言った。なんていうのが、新太の描いた作戦だったかは当時の彼にはわかるはずもないが、現実はそうはいかなかった。店主は新太にげんこつを食らわせたのだ。痛みが頭に広がる。「いいかい。君。もし、君がお金を持ってきたら、売ってあげるだろう。でも、そのお金は君のお父さんやお母さんが懸命に働いたお金なんだよ。殴られるなら、殴りかえすんだ。やられたら、やりかえせ。それで、親が我慢してるなら、親が大馬鹿ものだ。いいかい。世の中は表だけで成り立っているわけじゃない。裏の世界を君も覗きたいだろう？」店主はそう言って、店の中に入っていった。結局、新太は殴り返しもしなかった。父の立場がまずくなると思ったのは言い訳に過ぎない。ただ、怖かった。抵抗して、ポロポロになって、倒れている自分を想像した時に、顔から火が出るほど恥ずかしかった。でも、新太の心には後悔が残った。

今、新太は拳をきつく握りしめる。風を前にして、新太の怒りは沸々と頂点に達しようとしている。風が、こちらを完全に振り向いたのと、新太の拳が直線運動したのは同時だった。風は腹に拳を食らって倒れた。そして、風の倒れた頭にはバットの先端が刺さっていた。闘いは終わったのだ。炎がこちらを振り向いた。音が聞こえる。焚き火の燃える音？いや違う。炎が拍手をしているのだ。新太は再び、バットを握り、炎に向かう。と、炎はもういなかった。姿はどこにも見当たらない。声だけが、残り香のように聞こえてきた。「よく風を倒したな。次の暗黒の息子はまだ時間がかかるようだ。それまで、せいぜい目的を果たすことだな」目的……。新太は自分が出雲市に母を殺しにきたことを忘れていた。何よりも優先すべきことだったにも関わらず。弥生の言葉が新太を空虚にする。「さあ、行きましょう。あなたの母親は、この出雲市のどこかにいる」果たして可能だろうか？新太は一人弥生の後ろ姿を見ながら、思う。二人の落ちぶれたモノノフは辺りが暗くなっていることに気づいた。新太はこれ以上他人を巻き込みたくないと切に願った。笹金はきっと死んだのだ。直感で、新太にはそれがわかった。だが、知ったところで、何も変わるわけではないし、この人の群がる世界で一人の人間を探していることの難しさを感じる。新太は母の名前を尋ねて回るしかなかった。母の名前は真形（しんぎょう）真弓（まゆみ）珍しい苗字だから、知っている人は少ない。二人はその日、空き家の一つに侵入し寝入った。弥生は既にただの人間に戻っていた。新太は弥生が光ることについて何も聞かなかった。弥生も何も言わなかった。謎だけが二人の間に残った。

弥生の夢に頻繁に光が干渉を始めたのは、この頃からだった。期限はあと3日だった。弥生はまどろみながら「もっと力が欲しい」と訴えた。光は一つの忠告をした。懐にある卵のことだ。卵は弥生によって暖められ段々と大きなものになっていた。卵が割れるときは迫っていた。卵は弥生が12歳の頃を思い出させた。母親が竹刀を持って弥生を叱責している。母親は、いつも生卵を食べている女だった。父が死んでから、弥生となった名前に刻印を刻みつけようとする母親の狂気は弥生の体に赤いアザとなって残った。新太は弥生の裸を見たことはなかったが、見れば絶望しただろう。弥生の服に隠された部分のほとんど全ての箇所にも母親の濁った愛情の印がつけられていたのだから。母親はやがて、冥界の門という新興宗教に入信する。そして、弥生は初めて使命を授かった。大したことはない使命から始まった。起床時間を守ることや、お祈りを熱心にするなどだ。だが教団はちょうど変革期だった。弥生は大人たちの罪深い欲望の犠牲になった。それから、弥生は逃げ出した。12歳は決定的な年だった。弥生の人生における親との決別、そして潔癖性の喪失だ。夢がもし、夢でしかないならば、どんなに良かったろう。過去が過去でしかないならば、どんなに良かったらう。しかし、弥生は今も過去の恩讐に苦しめられている。救いは自らの成すべき使命だった。むちゃくちゃな論理に凝り固まった過去から学んだ弥生はやがて、本物に出会ってしまう。光の存在である。弥生は光のいる世界へと進むことに成功した。そして、そこでさらに深い使命を帯びることになった。だが、と弥生は思う。二つの世界の融合が始まった今、新太をどこへ連れていけばいいのだろうか。事情は込み入っている。新太は父親から使命を果たすことを強要されている。もし、新太があと3日以内に使命を果たせないならば、世界は再び分離するだろう。3日で10人の暗黒の息子を相手にしなければいけないのか。その時、弥生は気づいた。卵は向こうの世界の持ち物なのだ。新太を連れていくことは新太を世界と一つにするということだ。なるほど、卵をもし、新太が受け入れるならばより遠くの世界に近づく。よく見ると、卵には一つの斑点がついていた。「なるほど、そういうことか」弥生は一人身を震わせて、かろうじて眠れる空間から身体を起こした。新太はまだ眠っているらしい。夜が明けようとしていた。

弥生は歩きはじめた。卵は目的への道標だった。新太も何も言わずについていく。卵を胸に感じながら弥生は川沿いの道をずっと歩き続ける。新太はバットを引きずるようにして持っている。二人の間に会話はない。半日くらい歩いたろうか、巨大な煉瓦造りの家が見えてきた。杉や楓の木々の間から赤色の姿が見えてくる。古い犬小屋を通り過ぎて、二人は家の戸の前に立った。頑丈な合金でできたドアの向こうには、もしかすると？新太は母親の老いた姿を想像した。でも、イメージはやがて崩れて若い頃の母親の姿が立ちのぼってくる。「怖いな」新太は呟いた。弥生は怒らなかつた。ここは、もしかするとこの旅の終着点かもしれないのだ。玄関にあるインターホンが不気味に黒く光っている。弥生は新太を見てから押そうとした。新太も頷いた。いつまでも逃げているわけにはいかないのだ。自分の持つ運命に対峙することこそが、この世の善悪を知る唯一の方法なのだ。真実の口は大きな空洞を開けて待っている。四肢を食いちぎられようとも、その口に二人は向かって行かなければならない。弥生はインターホンのボタンを押した。中で鈍い音が響いた。外にも音が響いてくる。カタン、と木の上から何かが落ちた。新太が振り

返ると、黒い鳥が一羽、木の上でこちらを見ていた。新太は鳥を無視して、ドアに正対した。鍵を外す音が聞こえる。頑丈な鍵のようだ。音で重厚さが窺い知れる。ドアがわずかに動く。中から一人の老人が顔をのぞかせた。「何の用だ」老人は敵意のこもった調子で、弥生を見た。新太はまだ老人の顔さえ見ることはできない。私は百戦錬磨のタフネスだ。弥生はそう言い聞かせていた。だから、どんな時でも冷静なはずだ。唇の端を吊り上げて笑った。「すみません。ここにおられる方に用があって」弥生の言葉は途中で遮られた。老人が泣き始めたのだ。新太は何が起こったのか、わからなかった。ただ、老人の嗚咽は続いた。二人は黙って寒い玄関先で佇んでいた。弥生は不吉な気配を感じた。「誰なの？」後ろから女の声がした。しわがれた声だった。新太の耳は瞬時に反応した。それは脳に達するまでもなく、脊髄で起こった反射のようなものだったのかもしれない。でも、確かに新太の体には、この声が『あの女』だと気づかせるものが備わっていたのだ。ドアは開け放たれた。新太と弥生、老人と老女は向かい合った。老女は気づいた。家を訪れた男の方に見覚えがあることを。新太は拒絶を恐れた。また、頬を叩かれるのを恐れた。だが、真形真弓は新太の前に歩を進め、強く抱きしめた。「よく来たわね。新太」これが二人の一回目の邂逅である。いや、出会いは必然だったのかもしれない。弥生は少なくとも知っていた。ここに目的があることを。新太は信じられない思いでいた。遠く20年近く離れていた手紙だけの存在であった母がここにいる。人の体の確かな温もりは新太に使命を忘れさせるには充分だった。弥生は卵をもう一度取り出し、じっと見る。ヒビだ。卵に見える僅かな亀裂は、次第に大きくなるだろう。かつて新太と同じ運命に挑戦した男のことを考えた。あの男も卵を孵してしまったのだ。ダイジナイモウト。あの男の怨嗟に満ちた声が聞こえてくる。結局、あの男は強かったのか？弱かったのか？弥生は自らに問いかけるが、答えはまだ出ない。何でもない他人を好き勝手に利用できた男が、大切な身内を手にかけることができなかつた事実は重い。新太はより気性の優しい男だ。新太と真弓は離れた。二人はしばし、見つめ合った。新太は疲れていた。整理するべきことがいろいろとあるのだろう。真弓の方は新太と弥生に中に入るように促した。老人の名前は金床十郎という。十郎は2階に上っていった。その足どりは重かった。二人は応接間に通された。真弓は熱いアールグレーの紅茶を入れてくれた。真弓は二人にこの出雲市についての噂話を含んだ事実を語り始めた。しばらくすると、さすがに、真弓も無言になった。突然、ガラスの割れる音が聞こえた。弥生と新太は目を合わせる。暗黒の息子たちがきたのだ。十郎の叫び声が聞こえる。銃声だ。真弓は冷静に音のした方を見ている。「また、あの人の刺客でしょうか」真弓は“あの女”という音に力をこめた。そして、心底毛嫌いするように言い放った。「あなたの父親佐藤省吾はもう人ではないわ」

「父のことを知っていたんですか？」新太は驚いた声で応じた。会話の間にも銃声が続く。新太と弥生が立ち上がろうとするのを、真弓は手で制する。「十郎が全て片付けてくれます。彼は腕の良い猟師でしてね、10年前に東北の熊をとりつくして、出雲市に流れ着いたのを私が拾ったのです」またガラスが割れる音だ。真弓はゆっくりとコーヒーをすすった。そして新太の質問を思い出したように答えた。「そうです。ずっと前から私を殺そうと狙っています。というのも、彼の計画をある日私が知ってしまい、阻止しようとしたからです。その時から私と彼の亀裂は決定的になりました。私は決してあなたが嫌いであなただけを残して行ったわけではありません。まだ

、あなたが元夫である省吾の馬鹿げた考えを消し去ってくれる希望も抱いていたのです。しかし、ある日、あなたの元から省吾が去ったとあなたの手紙で知って、ついに計画が始まったと知りました。私はすぐに対策を講じました。その一つが、あの世界における光です。光は、この世界と交わることを拒否する頑丈な防壁でした。最初は十分に機能していた光。ただ、光も少しずつ闇と一体化していきました。今日は長いですね。いつもなら、十郎は始末に10分とかからないのに。まあ、いいです。続きを話します。そして、光闇（こうあん）の巫女と呼ばれる人間を呼び寄せた。それが、あなたですね。弥生さん。いえ、米原皐月」弥生はぴくりと眉を片方上げると、言葉が耳に入らなかったように、表情を強ばらせた。「あなたの残酷な人生についても知っています。あなたの母親から全て聞きました。そして、あなたが新太の父であり、私の夫であった省吾と接触したことも」新太は黙って真弓の話しを聞いていた。弥生も口を挟まない。おそらく、真実が語られているのだ。真実の前に二人ができることは沈黙しかなかった。真弓は語り続ける。厳格な女教師のように、そして理路整然と。「省吾は考えた。光を倒すには光の元となる人間を捕まえることだと。そう、光は弥生さんの母親です。光は、弥生さんを受け入れた。ただ、それは闇につけ入る隙を与えた。どうしようもなかったのです。光は弥生さんを一部と認めたのは自然なことでした。次に省吾が狙ったのは“世界を統一するもの”です。最初、省吾は自分に忠実だった荒木和馬という人物に使命を与えます。見守る役に弥生さんを据えて。しかし、荒木という男は自分の最愛の妹を殺すことができなかった。闇の失敗です。光は32人の刺客を送り、妨害しようとしていました。けれども、できなかった。和馬は非常に狡知に長けた、あちらの世界の人間でした。理をよく知っていた。だから、光の息子たちは全て退けられました。そこで、省吾は何故失敗したのか考えたのでしょうか。詳細に、彼が何を考えたのかまではしりません。しかし、私なりに考えるとこういうことです。省吾は闇にとって大事なものは血だと思ったのです。新太の彼への思慕、愛情、尊敬を利用しようとしたのです。でも、それは不可能なことは明白です。だって、新太は今、私に会って、全てを知ろうとしているのですから。ただ、残念なのは、“世界を統一するもの”が死なない限り、この世界の一体化原理は止まらないということです。つまり、新太は最愛の人間を殺すか？もしくは自分が死ななければならない難しい立場にいます。この原理を破る方法はまだ見つかっていません。これは母親として言うのではありません。一人の人間としていうのです。『人類のために死になさい。新太』」

真弓は一錠の薬を取り出した。白い錠剤だ。新太は真弓が自分を愛していないと悟った。そして、生き残ろうとする新太の意志と相反することは明白だった。「飲め、というんですか？」他人行儀な会話の中に敵意すら混じる。銃声はまだ続いている。真弓は平然と言う。「そうです。苦しまずに死ねます」新太は心底、この真弓という母親を憎んだ。真弓が考えているのは人類のことであって、決して新太のことではない。弥生が立ち上がる。「あなたは母親失格です」弥生の声は部屋の空気を緊張させた。真弓は座ったまま、笑みを浮かべた。「あなたに何がわかるでしょう。省吾の全人類を滅亡させるという狂気を私は食い止めなければならない。明るい未来のために」犠牲的精神は讃えられるものと信じている狂気によって彩られたのは真弓も同じらしい。真弓は悲劇を知り、立ち向かう年老いたヒロインの役を完璧に演じきっていた。だが、一方で、新太は『では、何故暗黒の息子たちが新太を狙うのか』が謎だった。弥生はそんな新太の

動揺を見透かしていたのだろう。真弓に決定的な一言を告げる。「あなたは真実を語っていない」今度は真弓の目が大きく見開かれた。弥生の中に誰か別の人間を見出したように。弥生は語り出した。「光が闇に侵されたのと、同じように闇もまた人間であったのだから、決して死ぬことを許さない本能が働いている。それが、刺客の数に表れていた。けれども、闇の本体である省吾は新太とは血縁がある。だから、本能が薄まった。親子の情愛によって。だから刺客の数は減った。光はとても弱い。だから、私は闇を取り入れた。光にたいした力はない。新太。あなたは死ぬ必要はないわ。真形真弓は、あなたが闇になることを恐れているのよ。あなたの父の寿命が尽きようとしている今、あなたの父省吾はあなたを後継者に選んだ。だから、『最愛の人』ではなく、闇の脅威を殺すように命じたの。そう。あなたはとっくに気づいているでしょう。真形真弓はあなたの最愛の人ではないということに。もし、あなたが死ねば、闇は消える。そして、私もあなたも弱い一人の人間に戻るのよ？世界と無関係な一匹の猿にね。それが私には許せない。あなたは生き残るべきよ」真形真弓は弥生の言葉を終いまで、聞いていた。いつの間にか十郎が応接間に入ってきていた。銃は大きな猟銃だ。「しとめました。奥様」弥生は卵を見た。斑点が3つになっていた。「二人の暗黒の息子が死んだ」呟く弥生に、新太が宣言する。「俺は生きたい」真形真弓の目の色が陰しくなった。十郎は銃を持って、真弓を見ている。命令があれば、いつでも、二人を撃つ。そんな決意が感じられた。真弓は迷っているようだった。決断が遅れた。そんな時だった。応接間に巨大な影が現れた。「十郎！！」真弓が叫ぶ。十郎はどこに狙いを定めるべきか迷っている。だが、とりあえず、影の中心めがけて、発砲した。銃弾は影を突き抜けて、家の壁に穴をあけただけだった。真弓が叫んだ。「新太。避けなさい」その直後、新太の体の横を黒い物が走った。間に合わない、はずだった。影は新太の死角から襲ってきたのだ。しかし、新太は無事だった。代わりに、真弓が床に倒れていた。新太は呆然としていた。真弓の頭に後悔が渦巻く。母親としての本能がこんな時に出てきてしまったのだ。使命を誤った老女の胸には傷がついていた。「新太。来るわよ」弥生が叫ぶ。影がまた大きくなった。今度は反対側の壁に影が伸びる。銃声がした。影は突然消えた。十郎が撃つたらしい。部屋の隅に男が一人倒れている。小さな小人のような男だ。炎の音が聞こえてくる。「4番目の息子、銘。5番目の息子、集。6番目の息子、絶」新太は見上げた。炎は天井に蝙蝠のようにぶら下がっている。十郎が銃を構えた瞬間に消えてしまった。後には、煙草の臭いが残された。「母さん」新太は真弓に駆け寄った。真弓は優しく、新太の頬を手の平で撫でると、目を閉じた。十郎の口から嗚咽が漏れる。新太は悲しいのか、怒っているのか、わからなかった。心は氷河同然に氷ついていた。そして、ゆっくりと動き始めていた。『弥生は光。俺の敵。そして、最愛の人』

友というべきものがあるとしたならば、もし仮に新太に友というものがあるとしたならば、裏切り者のジョーだろう。彼は日本人だったが、仲間内で、そう呼ばれることを好んだ。彼を本名で読んだ人間はきつい視線にあうか、それですまなければ殴り合いに発展した。ジョーは新太の復活を助けた一人だ。今は東京のどこかに住んでいることしかわからない。ただ、過去は強烈に新太にジョーのことを思い起こさせる。ジョーと新太が会ったのは子供時代よりずっと先だった。高校生の頃、母は既に家から去り、父は書齋と仕事場を往復する日々だった。新太は毎夜。決められた生活費の中から外食を食べた。牛丼を食べる時は金が足りなくなった時に限られた。

後は、カレー屋で、ビーフカレーなどを食べた野菜が不足していたために、たまにサラダバーつきファミリーレストランにもお世話になった。ジョーと仲良くなったのは境遇が似ていたせいもある。ジョーの両親は共働きで、夜遅くまで働いていたために、ジョーは自分でアルバイトして、そのお金で自活して生きていた。そんな、自負が彼を少し暴力的にしたのかもしれない。だが、新太はそんな彼をいつの頃からか、食事によく誘うようになった。特に二人が食べに行く時は牛丼屋になった。300円未満で食べられるメニューを二人は頼み、心ゆくまで話しあった。学校のこと、両親のこと、そして未来のこと。ジョーはいずれ大学に行って、立派な企業に就職したいなどという月次なことは言わなかった。彼が見据えていたのは、起業である。高校を卒業し、二十歳になるまで修行をした後、人材派遣の会社をつくりたいと夢を語った。彼の中に両親のように、使われる側の人間で終わりがたくないという気持ちもあったのかもしれない。ただ、それは新太の予想でしかなかった。一方、新太の夢は少し異質だった。それは、女性的という過去の概念がぴったりとあてはまるものだった。つまり、愛する人と結婚して家庭を、温かい家庭を持つことだったのである。そんな新太にジョーは共感してくれた。そして、何度も励ましてくれた。合コンのセッティングもしてくれたりして、新太の目に適う人を一緒に探してくれた。だが、高校時代、そして大学に進学してからも、そんな女性は皆無だった。試しに一度や、二度付き合ったことはある。セックスまでいったこともある。ただ、深みがなかった。まるで、女性は浅い水たまりだった。少し、足をつけてしまえば、すぐに底が見えてしまうのだ。ジョーは、会社を持ち夢を叶えた頃、新太の夢が一向に進んでいる気配がないのを後ろめたく思ったのかもしれない。ついに、ジョーは新太に結婚したことを知らせなかった。後で、風の噂でジョーが結婚したことを知った新太は悲しくなった。それから、新太はジョーに会っていない。今、まさに新太の夢は限りなく叶うかもしれないという可能性を秘めていた。こんな時に、あいつがいてくれたら。新太はそんな思いでジョーを思い出すのだった。しかし、ジョーは出雲市などにいるわけではないのはわかっている。ただ、新太は母を失って、父もあてにできない今、弥生を守りつつ闘わなければいけないということだ。弥生は守られることなど望んでもいない。それに、敵は新太のみを狙ってくるだろう。ただ、弥生に万が一の事があれば、新太は自分の夢に申し訳がたたないのだった。「ジョーどこだ」新太は夜、母が使っていた寝室で寝言を言った。ジョーは決して現れないだろうとわかっている、新太の脳はジョーを探し、頼りになる誰かを探し求めた。それほど、目の前で知っている人間が死ぬとうことは重いものだった。真弓の死体は十郎の頑なな拒否によって、光で送られなかった。弥生も強引に送る気はないようだった。真形真弓はただのヒトとして、死んだ。十郎はかねてから、用意していたという墓に真弓を埋めた。そして、三人は真弓を暗闇に残して家に入った。

朝になった。十郎はもう起きだしている。いや、もしかすると寝ていないのかもしれない。目が赤く充血している。そして、肌荒れもひどい。十郎は自分の使命を理解していた。それは、真弓の遺志を継ぐことである。それが、新太を殺すことなのか、それとも新太の敵を殺すことなのかは判然としないうちに違いない。それでも、十郎は北国の人間らしく結論を出した。真弓は新太が死ぬことを望んでいないと。そして、十郎は真弓に全てを知らされているわけではないらしい。十郎は新太たちが、説明しようとする、それを拒んだ。「わしは真弓さんから聞かされていた

お前がやってきた時が自分の死ぬ時だってな。覚悟はしていたんだろう。それまで、ここにはお前みたいな年の人間は一人も尋ねてこなかったよ。だから、お前を見た時は取り乱してしまった。真弓さんが死ぬのに耐えられなかったから。でも、真弓さんは喜んでお前を迎えた。だから、真弓さんは死を恐れていないと知ったんだ。わしは恥ずかしかつた。真弓さんの最後を汚すような真似だけはしないと誓った。そして、いつもどおり、仕事に精を出した。今までは不思議な力がこの家を守っていたんだ。あいつらは決して、この家には入ってこれなかった。でも、それは崩れた。わしはここを去るべきだと思う」十郎の意見はもっともだった。弥生も同調し、新太たちは家を出ることにした。十郎は四輪駆動のジープを車庫から出してきた。二人は後部座席に乗って、十郎が運転した。十郎は無言で、行き先も告げずに、走り出す。「どこに行くんだ？」新太が聞いた。十郎は「とにかく、高速に乗って、北を目指す。追ってくるなら逃げるまでだ」弥生は卵をこっそりと見た。ヒビは前よりも大きくなっている。弥生は卵が孵る前に決着がつくことを願っていた。暗黒の息子たちは新太を追ってきた。つまり。東京からこちらに来ている。ちょうど打ち合うことになる。全ては予定どおりだ。横に座っている男が果たして、使命を果たせるかどうか、興味深く眺めていた。新太は昨日寝たりなかったらしく、うとうとしている。バットを握ったままの姿勢で。ただ、一つ弥生が確信をもっていえることがある。『光と闇は調和しない』

7番目の暗黒の息子は新太を知っていた。一度死んだ男だったが、もう一度影をかき集められて、練り上げられた。他の暗黒の息子たちもそれなりに、原型を伴った形に仕上げられていたが、6つ作ったところで、暗黒にもし意識があるならば、という仮定つきだが、暗黒は学んだのだ。1番目から6番目の息子は無作為に造られた能力だけを持った人間たちだった。だから、簡単に新太に敗れ、十郎に撃たれたのだ。しかし、7番目の息子は暗黒と似通っていない。むしろ、光の成分を抽出したものが原料であるとさえいえる。7番目の息子はジョーといった。新太のかつての友である。しかし、真実を言うならば、新太の友だった物ではない。不可分な精神を紡ぎ合わせた恐るべき闇というべきものだ。ジョーは新太を知っている。新太に対する感情は友情という単純な言葉でくくれるものではない。泥々した巨大な堆積物の上に羨望という名の楼閣が直立している。そして、楼閣の天辺には恨みという名の一本の木が天に向けて伸びているのだ。ジョーの顔を持った暗黒の息子は新太に親しげに近づいた。とある、サービスエリアでのことである。炎は相変わらず無口だった。彼がどこからか、調達してきた車で二人は新太たち3人を追った。どこまで行けるかわからないガタのきた中古車だった。ダークイエローに塗られた車体は塗装が剥げかけているのと、錆が来ているのとで、みすぼらしくなっていた。それでも、炎は車が振動するまでスピードをあげて新太たちを追った。炎の頭の中にはGPS機能が備わった追跡システムが備わっているのかと驚いたが、もちろん言葉には出さなかった。ジョーは今の新太を知らなかった。聞きたい気持もあったが、炎は目の奥で答えることを拒否した。ただ、一つ、どうしてもジョーには確かめたいことがあった。だから、炎の隣の助手席で声に出した。「新太の持っているバットは何色かね？」炎は長い間沈黙を貫いた。ジョーが炎からの答えが返ってくることを諦めかけた時、炎は低く、通った声で呟いた。「七色だ。虹色ともいう。バットには7つの異なる力が備わっている。ただ、新太は気づいていない」「そうか」ジョーは自分の予想が

外れたのを楽しんでいた。あくせくした、現代人とは異質な精神を持つ男だったのか、それとも暗黒によって集められた残滓はもはや、異質な物しか残っていなかったか定かではない。ただ、ジョーは高校の時、新太に贈ったバットが、新太の命綱なのではないかと考えていたのだ。赤色の珍しい金属バットはきっと、新太はもう捨てしまったのだろう。自分が感傷に浸っていたことを認めた上で、ジョーは使命を果たすべく、車を降りた。3人はエリア内の店にいるらしい。レストランを見回すと、炎がある一点を見ている。端の入り口から一番遠い席で食事をしている3人をロックオンしたみたいだ。炎はジョーを見た。ジョーはゆっくりと歩き出した。ジョーの役目は闘うことではない。言うなれば精神攻撃だ。なんと、軟弱なことか。だが、もしジョーが新太に倒されるならば、新太の心には拭い去り難い傷が残ることはジョーでなくともわかった。ジョーは新太たちから数歩のところまで来た。最初に反応したのは十郎だった。長い袋には銃が入っていると想像できた。炎はやって来る時に、まず開口一番、「次はお前の番だ」と言った。それから、前の暗黒の息子が銃で倒れたことを知らせたのだ。銃を袋から取り出そうとすると、新太がこちらを見て、ジョーをジョーと認めたらしい。十郎に銃を出す必要はないことを告げる。「久しぶりだな。ジョー」新太はいつもの人を信頼している目つきをしている。ジョーは冷静になった。この目を見るのが、何より嫌いだったんだ。ジョーの気持は波打ったが、結果として、その波は相殺し波は消えた。ジョーの顔は奇怪な微笑を作った。極めて人工的な生物の生の字も感じさせない表情だった。「よお。新太。ジョーだ」ジョーの口ぶりは柔らかかったが、新太という時にだけ、わずかに震えた。もう一人の女、弥生は食事を続けている。図太いのか無関心なのか、ジョーは判断に困った。この女を遠ざければいつでも新太を倒すチャンスはあると思ったからだ。倒す、そうだ、倒すんだ。ジョーは自虐的な笑みを浮かべた。つまり、俺は殺される。ジョーの頭には生物としての本能は微塵もない。だが、代わりに使命という重責があったのだ。生きたいと思うなら、始めからこんなところに来はしなかった。だが、来なければいけなかった。何故、ライオンがガゼルを襲うのか？そんなことはライオンに聞いてくれ。ただ、合理的な理由がなくても、飢えは生き物を導くものだ。新太は立ち上がって、握手を求めてきた。いつから、お前はアメリカンになったんだよ、とジョーは思いながら、にこやかに応じる。二人の友情は再起したかに見えた。ただ、その姿はハリボテで作った船よりひどいものだったに違いない。二人を見て、弥生が鼻を鳴らした。軽蔑しきった目だ。穢らわしいものを見る目だ。4人は車に戻った。新太とジョーは後部座席に、そして弥生と十郎は助手席と運転席にそれぞれ座った。新太と十郎は音信不通になってからのことを話しあった。ジョーの頭からは洪水のように記憶があぶれてきた。そして、新太との思い出も時たま刻んだ。新太は提示された友との過去を見て、戸惑っていた。二人の間にこんなにも見方が違ったのか？と驚くばかりだ。ようやく、話が一段落すると、二人は無言になった。新太とドアの間には透明なバットが置かれている。ふと、ジョーは自分が贈ったバットの行方を聞いてみたくなった。「新太。俺がやったバットはどこにいった」「ああ。それなら、間違いなく、これだよ」新太は左手でバットを握りしめて続ける。「握った感触が懐かしかった。何故か、さっきわかった。これは俺のバットなんだ。ジョーにもらったバットの感触だ。そのおかげで俺は生きていられる。感謝するよ。君が暗黒の息子であろうとね」

「知っていたのか」ジョーの口から溜息が漏れる。新太は悲しそうに首を振った。「そこは否定してほしかった」「どうしようもないさ。事実なんだからな。そして、俺は嘘をつく生き物じゃない。そうだろ？」ジョーは問い返す。「そうだった。だから、この質問をした。嘘であってほしいと」新太はバットを握る手に力をこめた。グシャ。バットは車内を寸分違わずにジョーの頭を打った。「さよなら、ジョー」新太は目から涙が出ているのに気づいた。バットは赤く染まっていた。

新太の泣き声とともに、弥生の歌声が響く。ジョーの骸は光に包まれていく。流れる空の雲へ体の一部だったものは細かい粒になって葬送されていく。新太はまだ自分のいる席から動けない。十郎はじっと前を見て運転を続けている。「魂の子守唄を、今歌おう。永遠なる生の宿命としての死を受け入れたものを。流れる天の川の一部としてあなたは輝く」ゆっくりとしたテンポで弥生の歌声がジョーの体も血も全て無くしていった。新太には休息が必要だった。乱れた心を立て直すための一夜が。弥生は十郎に指示をして、高速道路をおりた。いつの間にか、十郎は新太の母親の命令に服するように、弥生に従っていた。もともと、十郎はあまり喋りたがらなかった。沈黙が3人を包む。夜がやってきた。都会の濁った空で、星はほとんど見えない。夜空には黒い帳がおりているのみである。街中の交差点。信号で止まる。時間が惜しい。しかし、新太の復活には替えられない。新太はこの物語の主人公であり、闘うべき人間なのだから。十郎は駐車場つきの大きなホテルを見つけて、そこに入った。弥生に促されて、新太も車から出てくる。3人はホテルのフロントに向かった。フロントに立っている中年の男は愛想よく3人を丁重に扱った。恐らく、内心は奇怪な親子連れと思ったのかもしれない。でも、新太の表情に休みが必要なのを見てとって、すぐに部屋を取ると、案内してくれた。フロント自らである。彼は御大層にエレベーターの中で自分の名前まで名乗った。「深津と申します。何か御用がありましたら、私にお申し付けください」弥生は深津の親切心に警戒を抱きながらも、軽く頷いた。深津は微笑みを絶やさずに、弥生の子承を受け入れた。弥生と新太の二人部屋、十郎は一人部屋に別れた。

二人きりになると、新太はぼんやり立って、弥生を目で追った。弥生はベッドの毛布を剥いで、新太が入れるスペースを作る。新太はベッドに座り、ポツポツと語りだした。それは長い、長い、独白だったのかもしれない。でも、弥生は向かいあうようにベッドに腰かけて真剣な眼差しで聞いていた。ジョーは新太にとって心を許せる唯一人の友であったこと。ジョーとの思い出。時計の針が深夜を回っても、新太の話しが尽きることがなかった。誰の邪魔も入らない二人だけの空間で、新太は弥生に気持ちを包み隠さずに言い終わる。新太の中にはジョーがまた、裏切り者として戻ってきたと感じていた。でも、それは新太の一方的な思い込みであって、時に友であっても、闘わなければならないことはある。弥生は、そう諭して聞かせる。新太の中に巣食う友情幻想を破壊するために、弥生は心を尽くした。そうしなければ、新太が壊れてしまうから。新太は赤く染まったバットを見て、ジョーが共に闘ってくれていると思うことにした。それが、せめてもの心を安定させる方策だったのだ。

炎は8番目、9番目、10番目を探していた。彼らは三つ子である。いつも行動を共にしているはずだった。しかし、見つからない。感覚は確かに一本の電柱に息子たちが潜んでいると告げているのだが。炎は呼びかけた。「無斗、写楽、宗太。どこだ。姿を表せ」静まった住宅街に声

が響き、街灯によって作られた影の中からぬっと刀を肩にかついだ大柄な男が現れた。そして、その後ろに連なるようにして、二人の男がそれぞれ、金槌と紐を持って立っている。「炎か……」一番前の男が答えた。「無斗だな」炎は煙草を捨てて、確認する。「そうだ。そして後ろにいるのは俺の兄弟写楽と宗太だ。何をしにきた炎」無斗は敵意のこもった眼差しで炎を見た。炎は使命のことを手短かに話し、ついてくるように言った。「俺は闘いたくない」無斗は悲しそうに言った。とても、刀をかかえている男らしくない。炎は溜息をついた。暗黒の息子としてやるべきことは唯一つだ。強烈な光が無斗、写楽と宗太を照らした。叫び声が聞こえる。白日の元に晒された3人の顔は一様に醜く、人を見ると、不快を起こす種類の顔だった。炎は懐から手鏡を出して、3人に自分の姿を見せた。「影の中に隠れて、生きる道に幸せなどない。使命を果たし、息子たちの王となり、生き残るしか道はない。時が来て、新太が生きていれば、どの道お前たちは死ぬんだからな。わかったら、行くぞ」炎の影に3人は潜り込んだ。炎は舌打ちをして、また車を走らせた。場所はわかっている。グランドホテル。そこに新太たちはいる。待っている、新太。

弥生は一人考える。新太は既に眠っている。後、残された日は一日。私の命も後一日だ。死後の世界などというものがあるのならば、そこはどんなに幸せだろう。でも、きっと今生きている程の充実感はない。光は私を急かし続ける。でも、私は新太を導かなければならない。新太と私の間には未来などはない。あるのは、世界の還元のみだ。しかし、弥生は自分がどのようにして、新太に命を奪われるか、想像ができなかった。やはり、バットだろうか。それとも、手か。それとも、別の凶器？どれも、違う気がした。二人の間のこれまでの旅程に相応しい別のものがある気がした。でも、それが何なのか弥生にはわからなかった。弥生は寝るのが嫌だった。寝れば、光が弥生の意識に介入してくるだろうからだ。今夜も、お前の使命を果たせるようにしむけろ、と言うだろう。どうしても弥生は新太に冷たい態度をとれなかった。そうしたほうが新太にとって楽であるというのは明白であるにも関わらず。新太は第三の道を模索するかもしれない。でも、そんな道はあるのかしら？弥生の意識はそこで途切れた。新太が起きてきたからだ。「弥生」新太は熱をこめて私の名前を呼んだ。私も応じた。「新太」私たちはキスを交わし、崩れ落ちるようにベッドに入った。私たちは最後の夜を激しく愛しあった。私はその時になって、初めて気づいてしまった。私はこの男を愛しているらしい。永遠に確信の得られない答えだとしても、そう感じることで、人は深みにはまっていく。私は後戻りできない道を進みつつある。光に背く道。切り開くならば、切り開いてみせなさい、新太。私も全力で応援するから。でも、できるのだろうか。やがて、最後の日の朝が来た。あと、16時間。

新太はとても深い眠りにについている。彼の中には本当は裏切りものは自分ではなかったか？という疑念が湧いてくる。生きることに疲れ果てた男の戯言に過ぎない考え。弥生ならば、厳しくはねつけるだろう。新太は体力の回復とともに、生きる意志を徐々に取り戻しつつある。だが、相反する二つの事情が、新太の生への渴望を止めていた。一つは弥生のことである。彼女の身体に刻まれた傷痕を新太は確かに見てしまった。弥生は何も話さない。それが、まるで二人の間の公然の秘密であるように。新太も疲れきっていたし、さらなる重みを背負うことに躊躇する気持

もあった。そして、二人は普段通りの二人に戻った。

朝食は豪華なコース料理が運ばれてきた。十郎が顔を出して言った。「昨日は何も食べていないだろう。食え。元気が出るぞ」料理はフランス料理かイタリア料理か新太たちにはよくわからなかったが、慣れない味の中にも確固とした安定感がある。それが高級料理なのだろう。食事が終わると、新太は弥生に聞かされた。もし、新太が弥生の命を奪うならば、世界が一つになり、人類は死に絶えるだろうことを。そして、さらに弥生の言葉には驚くべき事実が含まれていた。

「これまでのことは全て目眩ましにすぎないの。新太。あなたを混乱させるためのね」弥生が言うには暗黒の息子たちは弥生を守る方向に転じる可能性もあるということだ。「俺はどうすればいいんだ？」新太の言葉は弥生を苛つかせる。「自分で考えなさい」弥生は自分の側に新太を引き込むことは正しいと思っていた。だが、でてきた言葉は新太を突き離すものだった。3人は再び、車に乗った。だが、車は動かない。十郎が一端外にでて、戻ってくる。「駄目だ。壊れてる」弥生は呟いた。「壊れたのか、壊されたのか」

新太は車に乗らなくていいことにホッとした。ここで、残りの5人を迎え討つ覚悟が決まった。突然、十郎が新太の方に走ってきた。「身体が勝手に動く」十郎の声は苦しそうだった。そして、新太の首に手をかけると、十郎は叫ぶ。「構わん。俺を打て」新太は手に持ったバットで遠心力をつけると、一気に十郎の腕をたたき落とした。バットは新太の意志に呼応するかのようになり、十郎の腕を激しく打った。それでも十郎の腕は鈍い音をさせて、脳の支配を免れた。「新太一。よくもやったな。俺は8番目、9番目、10番目の息子たちだ。十郎の身体は頂いた」十郎は車のトランクに走り出した。「まずいわ。銃を取る気よ」弥生が声を張り上げる。新太も走った。

(十郎すまない) 十郎は粉微塵に砕かれた。新太のバットによって。炎の音がする。「見事。新太。ためらいがなくなったな。最後の二人を連れてきたぞ」

長髪を逆立てた背の高い、やせ細った男と、口紅をした太った男が、いつの間にか駐車場に立っている。弥生は銃を構えた。「使えるのか？」新太が聞くと、弥生は「大丈夫。十郎が撃つのを見てきたわ」と事も無げに言った。炎の言葉が続く。「11番目の息子嶽と12番目の息子鍊だ。今までの相手とひと味違うぞ。ここからは私も参加させてもらう」2対3か。新太はバットを強く握りしめた。最初に動いたのは弥生だった。銃声がした。細い男の腹には風穴があいた。しかし、血は出ない。どんどんと、穴が黒い微生物のように動く物によって閉じていく。やせ細った男めがけて走った。隙をついて、攻撃するつもりだったのだ。すると、横から、強烈な衝撃が新太を襲った。新太は炎のいる方向に数メートル吹っ飛ばされた。炎は倒れた新太を引き起こすと、片手で襟首を掴み持ち上げた。やせ細った男の身体がさらに軟体動物のように形をとどめていない、と思ったら、一本の槍の形に変形した。槍を太った男が持ち、豪快に振り回し、新太に向かう。銃声がする。弥生が太った男を撃ったのだ。しかし、届く前に銃弾は弾かれた。駐車場に止まっている車の窓ガラスが割れた。弥生は素早かった。銃弾がきかないとわかると、新太が落としたバットを拾おうと、新太めがけて走った。しかし、太った男は体型に似合わず、猛烈なスピードで槍を新太に突き刺そうと、すり足で走っていく。新太の胸に槍が刺さった。「新太！！」弥生が絶望的な声をあげる。それは、使命を負ったものではなく、一人の女としての声だった。炎は新太の身体を放した。新太は立ち上がろうとするが、無駄だった。しかし、痛みは感じない。俺の体はどうなってしまったんだ。炎が太った男に呼びかけた。「やったか？」太

った男はここで、初めて口をきいた。「わからん」弥生が駆け寄ってくる。「新太！新太！」新太は目を覚まさない。新太の闘いは終わったのだ。新太の父省吾の計画は失敗した。物語は終わった。弥生はまた、いつもの使命に戻っていこう。光と闇の闘いは続くのだ。